

企画展「響け！創続の鐘

—名高商から名大経済学部への九〇年—

堀
田
慎一郎

はじめに

一 開催決定までの経緯

二 準備作業の概略

三 展示内容とその特徴

(一) パネル展示

(二) 物品展示

(三) ハンズオン・映像資料

むすびにかえて

はじめに

本記録は、企画展「響け！創続の鐘—名高商から名大経済学部への九〇〇年—」について、その内容、および企画から展示の終了までの経緯を紹介するものである。

企画展「響け！創続の鐘」は、第二〇回名古屋大学博物館企画展として、二〇一〇（平成二二）年一月三日（水・祝）から一二月一八日（土）を会期に、名古屋大学博物館三階展示室（約一五三m²）において開催された（展示時間は一〇～一六時、日曜日・月曜日は休館）。主催は、名古屋大学博物館・名古屋大学大学文書資料室・名古屋大学経済学部・社団法人キタン会である。

大学文書資料室は、まとまつた会期を設定した名古屋大学の歴史に関わる特別展や企画展を、二〇〇九年度までに三回開催してきたが、そのいずれもが名古屋大学博物館との共催であった。⁽¹⁾しかし今回は、博物館のほかに、展示の対象となる部局とその同窓会とも共催した点が、これまでになかった特徴である。⁽²⁾とくに、名古屋大学経済学部とその前身にあたる名古屋高等商業学校の同窓会である社団法人キタン会とは、準備の全行程にわたって、密接に連携して作業にあたった。

その意味で、本展示記録は、同窓会との連携事業としての自校史展示の事例として、より多くの意義を持つものとなるだろう。

一 開催決定までの経緯

本企画展の実施については、早くも二〇〇八年（平成二〇）年一二月に、社団法人キタン会（以下、「キタン会」と略）から事務局長の今井兼義氏と広報担当の山村哲朗氏が名古屋大学文書資料室（以下、「資料室」と略）に来室し、提案があつた。名古屋大学経済学部の前身である名古屋高等商業学校⁽⁴⁾（以下、「名高商」と略）が創立されてから九〇周年にあたる二〇一〇年に、記念展を開催したいという構想である。

これに対しても資料室は、全面的に協力することを承諾した。資料室は、この二〇〇八年に、名古屋大学教養部（一九九三年廃止）の前身にあたる旧制第八高等学校の創立二〇〇周年を記念する企画展「伊吹おろしの若者たち」（以下、「八高展」と略）を、名古屋大学博物館（以下、「博物館」と略）と共に⁽⁵⁾催していた。このこともあって、名古屋高等商業学校についても、創立九〇周年にあたる二〇一〇年に何らかの形で展示会を開催することを視野に入れていた。

ただこの時は、まだ八高展が終了したばかりであり、しかも翌年二〇〇九年の秋の開催がほぼ決まっていた名古屋大学創立七〇周年記念展の準備にすら、本格的には着手していない段階であった。またキタン会としても、すぐに展示会の直接的な準備作業に取りかかろうというのではなく、それに向けた資料収集が当面の課題と認識していた。再来年の展示会に向けて、資料室とキタン会が協力して資料の収集に取り組み、情報を交換していくことで合意した。こうして名高商の歴史を特集した展示を二〇一〇年におこなう見通しを得たことで、その前年に開催される名古屋大学創立七〇周年記念展では、名高商の歴史については最小限ふれるにとどめ、その他の部分を充実させる

ことができた。⁽⁶⁾

そして、二〇〇九年一月のキタン会理事会において、キタン創立九〇周年記念事業として記念展を開催することが承認された。

同年五月には、キタン会から今井事務局長、山村氏、博物館から西川輝昭館長（当時）、資料室から筆者（堀田慎一郎室員）が博物館に集まり、二〇一〇年秋の博物館企画展として、一〇月一六日（土）に開催が予定される二〇一〇年度の名古屋大学ホームカミングデイを初日として開催することで合意をみた。⁽⁷⁾ また、この企画展の準備過程において、キタン会が新たに収集した資料については、将来的には資料室へ寄贈されることになった。

そして二〇〇九年九月二日、前回と同じメンバーに、博物館の吉田英一准教授（当時）を加えた五人が博物館に参集した。ここでは、会期は二〇一〇年秋の最大二ヶ月程度とし、一月初旬に開催予定のキタン創立九〇周年記念式典をその中に入れること、展示で扱う範囲は、一九二〇（大正九）年に名高商が創立されてから、一九五九（昭和三四）年に名古屋大学経済学部が現在の東山へ移転するまでの、桜山に校舎があつた時代とすること、展示費用は、博物館の企画展費のほか、キタン会からも支出すること、などが確認された。

その後、キタン会にキタン九〇周年記念展委員会が設置され、二〇〇九年一一月二〇日にその第一回がおこなわれた。このキタン九〇周年記念展委員会（以下、「記念展委員会」と略）は、キタン創立九〇周年記念事業実行委員会の下に置かれ、キタン会から山村哲朗（記念展委員会）委員長および今井兼義事務局長以下一二名、博物館から吉田英一館長と蛭薙観順准教授、資料室から筆者と田測宗孝事務補佐員⁽⁸⁾（当時）、経済学部から福澤直樹准教授と小沢浩准教授、杉浦克博文系事務部教務課長の計一九名からなっている。この記念展委員会は、以後もおおむね月一回のペースで開催され、本企画展の方向性を決める場となつた。本企画展のテーマ「響け！創続の鐘—名高

商から名大経済学部への九〇〇年」も、この記念展委員会で決めたものである。⁽¹⁾

なお、本企画展は、名古屋大学全学同窓会大学支援事業（申請者＝経済学研究科長）に選ばれ、展示費用の支援をうけた。名古屋大学全学同窓会には、ここであらためて感謝之意を表したい。

二 準備作業の概略

企画展「響け！創続の鐘－名高商から名大経済学部への九〇〇年」（以下、「本企画展」と略）の準備をするにあたつて、当初から懸念されていたのは、資料室がどこまでの力を割くことができるのかという問題であつた。

二〇〇八年の八高展では、資料室に専任室員が二名配置されていたが、二〇〇九年四月からは、専任室員は一名削減されて筆者だけとなつた。週二九・五時間勤務の事務補佐員は配置されたものの、専任室員でなければできない仕事も多く、筆者への負担が高まらざるをえなかつた。それでも、二〇〇九年の名古屋大学創立七〇周年記念展では、創立七〇周年記念事業費から予算を得て、非常勤研究員二名を任用することができた。しかし今回は、そのような措置をとることは難しかつた。

筆者は、記念展委員会にはほぼ毎回出席し、それまで資料室がおこなつてきた企画展の概略を紹介したり、ごく大まかな本企画展の構成案を示したりはしたもの、思うように本企画展の準備作業に時間を割くことができなかつた。

当初の準備作業を担つたのは、専らキタン会であつた。具体的には、展示のための資料収集である。とくに記念展委員会委員長の山村哲朗氏は、『キタン新聞』やキタン会のホームページなどで会員に資料の提供を広く呼びか

け、情報がもたらされれば自らそこへ赴くなど、大変熱心に資料収集活動を展開した。一〇一〇年三月からは、創立九〇周年記念展専用のホームページを立ち上げた。本企画展には、この資料収集活動によつて新しく発見された資料も多く使われている。このほかにも同氏には、名古屋高等商業学校の校舎の模型（後述）の製作を一手にお引き受けいただきなど、多大なご尽力を得た。¹²⁾

筆者が、本企画展の具体的な準備作業に着手したのは、七月も下旬になつてからであつた。筆者の担当は、田渕事務補佐員の協力の下、展示パネルを制作し、ケース等に展示する展示物を選定してキヤブ・ション等を付けて、そのうえでそれらを展示会場にどのように配置するのかを考えることであつた。これらの作業は、本来であれば記念展委員会との意見交換をしつつおこなうべきものである。しかしスケジュールが切迫していたため、資料室からは筆者、博物館からは吉田館長・蛭薙准教授・野崎ますみ技術補佐員、キタン会からは山村哲朗記念展委員会委員長からなるワーキンググループによつて筆者の案を審議し、必要な修正を加えたうえで決定するという方法をとつた。

そのほか、名高商と名古屋大学経済学部の代表的な教員を紹介する四枚の展示パネルについては、いずれも名古屋大学大学院経済学研究科の奥村隆平教授、平川均教授、山田基成准教授、大塚雄太特任助教が制作した。これらの展示パネルに対応する展示物の選定も同様である。また、後述するハンズオンコーナーに置く「名高商Who's Who?」の製作は、資料室の田渕宗孝事務補佐員が担当した。

また、一〇月一六日の第六回名古屋大学ホームカミングデイでは、主会場の豊田講堂において、資料室による本企画展のプレ展示をおこなつた。ここでは、「創立の鐘」のほか、本企画展で展示する予定のもの数点をケース二つに入れて展示し、本企画展のビラを配布した。

そして一〇月二十五日には、筆者の指揮の下、記念展委員会およびワーキンググループによつて、会場

となる博物館三階展示室に展示パネル（まだこの段階では校正版）や展示物等を搬入し、展示パネル等を取り付け
るバンディアン（衝立）や展示ケースの配置などを決める作業をおこなつた。その後も、ワーキンググループのメンバ
ーを中心微修正をおこない、何とか無事に一月三日のオープンを迎えることができた。

三 展示内容とその特徴

（一）パネル展示

展示パネル（六八cm×一〇八cmおよび六八cm×一〇〇cm、人物紹介の四枚のみ九〇cm×一四〇cmおよび九〇cm×
一〇八cm）の具体内容については、全パネルを本記録に掲載した（掲載順は想定した順路による）。

制作にあたつての方針は、同じ名古屋大学の前身学校という共通性を持つている、二〇〇八年の八高展を基本的
に踏襲した。すなわち、学術的な調査を前提としながらも、新しい知見を導き出すことに必ずしもこだわらず、研究
者ではなくとも短時間で理解でき、楽しめるくらいの内容にとどめ、かつて名古屋市に名高商という大きな存在
感を持った高等教育機関があり、それが名古屋大学経済学部の前身にあたることを、親しみやすい形で紹介するこ
とを重視した。

ただ、本企画展と八高展とは大きく異なる点があつた。第八高等学校は、一九五〇（昭和二五）年に廃止され、
その系譜は名古屋大学教養部に受け継がれるものの、その同窓会である八高会は、名古屋大学の同窓会組織とは一
線を画している。⁽¹³⁾これに対し、名古屋高等商業学校も敗戦後の一九五一年に廃止されたが、現在ではキタン会とし
て名古屋大学経済学部と同窓会組織を一本化し、少なくともキタン会においては、名高商と経済学部の歴史は一体

化して理解されている。本企画展がキタン会との共催で、しかもキタン創立九〇周年記念事業として実施される以上、八高展のように名高商の歴史をのみをもつて展示の範囲とするわけにはいかない。

本企画展のストーリー性を担保する展示パネルの制作において、その下敷きになつてているのは、筆者の書いた名大史ブックレット第一〇巻『名古屋高等商業学校－新制名古屋大学の包括学校②－』（名古屋大学大学文書資料室、一〇〇五年）である。このブックレットは、学術的な裏づけを前提にしながら、その一方で高校生にでも理解できるような内容をめざしており、その意味では本企画展と趣旨が一致している。ただし、名高商の廃止までしか描かれていない。つまり本企画展は、単純な「名高商展」ではなく、名高商から現在の名古屋大学経済学部までの歴史を展望したうえで（展示題目のサブテーマにそれが示されている）、しかも内実は桜山時代（名高商から初期の名古屋大学経済学部）を直接的な対象としている。

名高商時代については、ブックレット執筆の経験もあったので、前述の方針を踏まえた展示パネルになつたとの自負はある。ただその一方で、名高商ばかりを強調するのではなく、戦後の名古屋大学経済学部に何がどのように受け継がれたのか、これを展示で示すことは考えていましたが、難しかった。東山移転の一九五九年ですっぱり切るのではなく、東山移転初期の一九六〇年代も展示の対象として、桜山時代との連続性を示す工夫などもしたが、依然として課題を残した。

また、これも八高展と同様だが、ストーリー性を担保するといつても、そのために説明文が多くなり、内容が煩雑になつてしまつては本末転倒である。そのため、これまで大学文書資料室が収集してきた写真を全てチェックし、当初想定していた項目が写真や図表だけでは表現困難であれば、思い切つて項目を変更することにした。

年表については、一〇〇九年の名古屋大学創立七〇周年記念展において、大きな年表パネルを展示して好評を得

たことに鑑み、今回も同様の企画があつたが、時間的な余裕がなく、通常の大きさのパネル一枚にせざるをえなかつたのは残念である。

(二) 物品展示

次に物品展示であるが、これも全展示物の写真とリスト（展示品名、キャプション、説明文）を本記録に掲載した。物品展示については、前述のようにストーリー性を展示パネルである程度担保したうえで、展示品相互や展示パネルとの関連性よりも、できるだけ一点一点が持つ魅力やインパクト、そして多様性を重視して選んだ。

リストの展示品名欄には、所蔵者と寄贈者名が明記されているが、「[個人名] 所蔵」となっている資料のうち小出悦子氏所蔵のものを除いた全て、および「キタン会所蔵（[個人名] 寄贈）」となっている資料は、本企画展のためのキタン会による資料収集事業によつて寄せられたものである。また、「大学文書資料室所蔵（キタン会寄贈）」となつてゐる資料が目に付くが、これは二〇〇五年二月にキタン会事務所が移転した際に寄贈をうけた資料であることを示している。こうしてみると、本企画展におけるかなり多く展示品に、キタン会が関係していることが分かる。

展示ケースは、六〇cm×一二〇cmの長方形のケースを一二個、六〇cm×六〇cmの正方形のケースを六個の計一八個である。博物館が持つてゐる、本企画展のために利用可能なケースは全て使つた。この数は、長方形が八個、正方形が一個であつた八高展はもちろん、長方形が九個、正方形が五個であつた創立七〇周年記念展をはるかに上回つてゐる。⁽¹⁵⁾もちろん、展示品の数が多ければよいというわけではなく、それほど広いとはいえない会場に、展示品をむしろ詰め込みすぎたと感じるほどである。ただ、それだけ有力な展示品が多く集まつたということはいえよう。

本企画展では、ケースによる展示物のほか、サイズが大きいために、バンディアン（衝立）に取り付けたり、直接床に置いて展示したものも少なくなかつた。パネルとケース展示だけでは、展示会場にメリハリがなく、どうしても単調になりがちである。その意味でも、会場のあちこちにこうした大型の、しかも総じて歴史的価値の高い展示物を配置することができたのは幸いであった。

(三) ハンズオン・映像資料

企画展では、会場の一角に入場者が自由に手に取つて閲覧できるハンズオンコーナー（資料コーナー）を設けた。このコーナーで展示した資料は、①「名高商 Who's Who?」、②「名高商一九二九年度入試問題」、③「響け！創続の鐘」、④『名古屋高等商業学校』の四つである。

①は、名高商および名古屋大学経済学部の歴史の中で重要な役割を果たした人物、あるいは卒業・修了した後には社会で大きな事績を残した人物を、一人あたり決まつた様式のA4用紙一枚（ラミネートフィルム加工）で紹介したものである。これは、二〇〇九年の創立九〇周年記念展のハンズオンコーナーで展示して好評であつた、「名古屋大学 Who's Who?」の名高商版で、「名古屋大学 Who's Who?」における名高商および名古屋大学経済学部関係者六名に、新しく一〇名を増補した。

②は、教育研究会編輯部編『全国高等学校専門学校入学試験問題集 大正十二年度』（教育研究会、一九一四年）から、名高商の入試問題を抜粋し、ファイルに綴じたものである。資料は、国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」からダウンロードした。展示パネルにも、この入試問題の一部を掲載したが、そこに全問題を見たい方はハンズオンコーナーに展示されていることを明記した。

③は、キタン創立九〇周年記念誌として、二〇一〇年一月にキタン会が刊行したものである⁽¹⁸⁾。各年度の卒業生による、今回のためには投稿された文章約二〇〇編を掲載し、オールカラーの巻頭グラビア（写真、年表、「キタン九〇年小史」）も大変充実している。とくに約二〇〇編の寄稿文は、名古屋高等商業学校および名古屋大学経済学部の歴史を研究するにあたっての貴重な回想資料になるだろう。なお、この記念誌には、大学文書資料室も巻頭グラビア写真の選定などで編集に協力した。

④は、前述のように、本企画展の名高商部分の基礎になつている筆者による著作である。ここで閲覧し、入手を希望する人には、博物館で無償配布した。

映像資料としては、名古屋大学経済学部卒業生⁽¹⁹⁾からキタン会に提供された第一回名大祭（一九六〇年）の八ミリフィルム映像（約八分）をデジタル化し、液晶画面で上映した。一九六〇年といえば、経済学部が桜山から現在の東山に移転した翌年にあたる。名大祭が始まった理由の一つに、校舎が各地に分散していた名古屋大学の学部を超えた団結を促進することがあつた。経済学部の東山への移転は、その歴史的文脈からしても大きな意義を持つおり、本企画展で上映する意味があると考えた。⁽²⁰⁾

そのほか、展示パネルで使った写真などをスライドショーとして編集し、会場内の大型画面で上映した。

むすびにかえて

以上のような内容の本企画展は、二〇一〇年一月三日（水・祝）一〇時にオープンした。博物館の企画展では、開始に当たつての式典は実施しないのが通例だが、今回はキタン会の主催により、岡田邦彦キタン会会長など多く

の参列者を迎えて、オープカットなどのオープニングセレモニーが挙行された。

また、連動企画としては、会期中の一二月四日（土）に名古屋大学博物館において、特別講演会「桜山校舎で過ごした青春時代」が、キタン会の澤木秀夫前会長、岡田邦彦会長を講演者に迎えて開催された。また会期中には、名古屋大学本部一号館玄関において本企画展のサテライト展示をおこなつた（その際の展示品もリストに掲載した）。

そして二〇一〇年一二月一八日（土）、会期中に三二四六人の入場者を得て、本企画展は幕を閉じた。とくに二〇一〇年一二月六日（土）には、キタン（名古屋高等商業学校・名古屋大学経済学部）創立九〇周年記念式典が、名古屋大学豊田講堂を会場に盛大に挙行され、その約五〇〇名の入場者の多くが本企画展を観覧し、好評を得た。

大学における自校史展示の意義は、①自校史を地域社会へ普及・アピールすること、②教職員や学生などの当該大学構成員としてのアイデンティティ形成を促進すること、③卒業生などの母校への関心を高めること、などが考えられる。その意味で、ホームカミングデイを会期に含めることができなかつたのは残念であつた。それでも本企画展は、キタン会と密接に連携し、とくに③の役割を大きく果たすことができたのではないかと自己評価している。



名古屋大学博物館①



名古屋大学博物館②



展示室の様子①



展示室の様子②



展示室の様子③



展示室の様子④



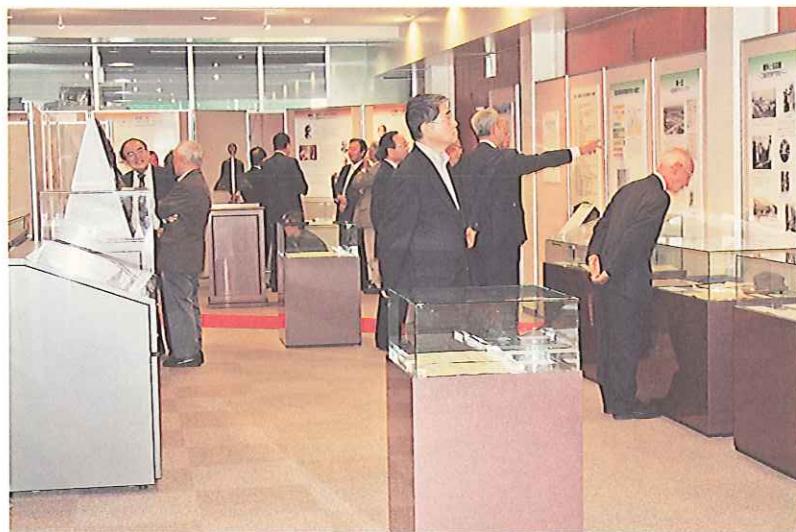
展示室の様子⑤



展示室の様子⑥



オープニングセレモニー (2010.11.3)

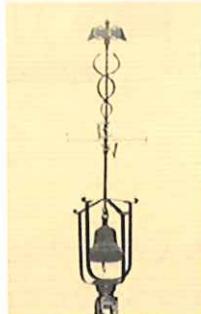


オープニングセレモニー後の展示観覧

創統の鐘と其湛塔



作られた当時の「創統の鐘」。「創統」の文字は「孟子」二巻からとられ、先人の志を後輩が受け継いで発展させる精神を表わしている。『紀元二五八四年』の紀元は、日本書記が記す神武天皇即位年を起点とする神武紀元(皇紀)。



「創統の鐘」の上の最頂部は、方位指針の上に鳳見鶴ならぬ翼をあしらった名高商の校章になっていた。



其湛塔は高さ約18メートルの鉄骨製であった。



名経専最後の卒業アルバムより。1番と4番で其湛塔と「創統の鐘」が歌われている。



1943年卒業アルバムより。戦時中であっても、「創統の鐘」と其湛塔は記念写真の定番背景であった。このあと、金属供出により其湛塔は取り壊されてしまったが、「創統の鐘」は生き残った。



「創統の鐘」を頂く其湛塔は、名高商の校地と建学精神の象徴であった。第1回卒業生が寄贈した「創統の鐘」の音色は、近隣の市民にも愛され、街のシンボルにもなった。

「響け! 創統の鐘」

名高商から名大経済学部への90年

—ごあいさつ—

名古屋大学経済学部は、前身となった旧制名古屋高等商業学校(名高商)が名古屋市桜山の地に創立されてから、今年(2010年)で90周年をむかえました。

このたびはこれを記念し、名高商の創立から、名古屋大学経済学部が現在地である東山に移転した頃までを中心に、その特色ある歴史を展示しました。

名高商や初期の名古屋大学経済学部では、どのような研究や教育が行われ、学生たちはどのような学風の下で青春時代をおくったのでしょうか。これまで名古屋大学とキタン会は、残された資料を大切に保存すると同時に、新たに多くの資料を収集してまいりました。こうした資料から選んだ展示品や写真が、それらを明らかにしてくれると思います。

なお、貴重な資料をご提供くださった皆さまには、ここにあらためて御礼を申し上げます。

2010年11月3日

名古屋大学 博物館／大学文書資料室／経済学部
社団法人 キタン会(名古屋高等商業学校・名古屋大学経済学部同窓会)

年表・名高商から名大経済学部への90年

| 年 | 月 | 出来事 |
|-------------|----|---|
| 1920 (大正9) | 11 | 勅令第551号をもって名古屋高等商業学校（名高商）設置。 |
| 1921 (大正10) | 4 | 渡辺龍聖が校長事務取扱となる（11月に校長に就任）。 |
| 1921 (大正10) | 5 | 授業を開始。 |
| 1921 (大正10) | 11 | 学友会を設立（翌年、学友会誌（1930年に『剣陵』と解題）を創刊）。 |
| 1923 (大正12) | 10 | 「商業経済論叢」（名古屋高等商業学校商業経済学会）を創刊。 |
| 1924 (大正13) | 5 | 同窓会其湛会が設立される（初代会長渡辺龍聖）。 |
| 1924 (大正13) | 6 | 創続の鐘、其湛塔が竣工。 |
| 1924 (大正13) | 9 | 商工経営科を設置。 |
| 1926 (大正15) | 秋 | 産業調査室を設置。 |
| 1927 (昭和2) | 11 | 昭和天皇が名高商に行幸。 |
| 1932 (昭和7) | 8 | 清川正二（名高商在学生）がロサンゼルス五輪100m背泳ぎで金メダルを獲得。 |
| 1935 (昭和10) | 5 | 渡辺龍聖校長が辞任し、国松豊教授が校長に就任。 |
| 1936 (昭和11) | 5 | 其湛会・学友会の有志寄付による剣陵会館が落成。 |
| 1938 (昭和13) | 7 | 勤労奉仕作業はじまる。 |
| 1940 (昭和15) | 11 | 学友会が解散し、報國団が結成される。 |
| 1941 (昭和16) | 9 | 名古屋高等商業学校報國隊を結成。 |
| 1942 (昭和17) | | 修業年限を3年から2年半に短縮。 |
| 1944 (昭和19) | 3 | 名古屋工業経営専門学校に転換し、名高商在校生は併設の名古屋経済専門学校へ。 |
| 1945 (昭和20) | 4 | 政府の命令により授業停止。 |
| 1946 (昭和21) | 4 | 名古屋工業経営専門学校を廃止し（3月）、名古屋経済専門学校（名経専）に一本化。 |
| 1948 (昭和23) | 9 | 旧制名古屋大学法経学部が設置される。 |
| 1949 (昭和24) | 5 | 新制名古屋大学が発足（法経学部を設置、名経専を包括）。 |
| 1950 (昭和25) | 4 | 法経学部が分離され、名古屋大学経済学部が誕生。 |
| 1950 (昭和25) | | 経済学部に産業調査室を設置（1953年に経済調査室に改組）。 |
| 1951 (昭和26) | 2 | 『経済科学』（名古屋大学経済学会）が創刊される。 |
| 1951 (昭和26) | 3 | 名古屋経済専門学校を廃止。 |
| 1953 (昭和28) | 2 | 経済学部同窓会啓友会が発足。 |
| 1953 (昭和28) | 4 | 大学院（新制）経済学研究科を設置。 |
| 1954 (昭和29) | 8 | 水田洋助教授（当時）が英國文化振興会奨学金によりグラスゴー大学へ留学。 |
| 1959 (昭和34) | 3 | 経済学部が桜山（旧名経専校地）から東山へ移転。 |
| 1969 (昭和44) | 9 | 其湛会と啓友会が一本化し、其湛啓友会となる。 |
| 1972 (昭和47) | 10 | 西ドイツのフライブルク大学との学生・教員の交流はじまる。 |
| 1972 (昭和47) | 10 | 同年にノーベル経済学賞を受賞したヒックス教授が経済学部で講義。 |
| 1973 (昭和48) | 4 | 経済調査室を経済学部附属経済構造分析資料センターに改組（1986年に経済構造研究センター、2006年に大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターに改組）。 |
| 1976 (昭和51) | 6 | 社団法人其湛啓友会を現在の社団法人キタン会に改称。 |
| 1979 (昭和54) | 2 | 入試制度改革により、2次試験に小論文を加える（～1987年度入試）。 |
| 1983 (昭和58) | 4 | 抜本改革による新カリキュラムを施行。 |
| 1987 (昭和62) | | 1988年度入試から、推薦入学制度を導入。 |
| 1993 (平成5) | 4 | 大講座制への移行が完了。 |
| 2000 (平成12) | 4 | 大学院重点化が完了し、経済学研究科が中心の組織となる。 |
| 2004 (平成16) | 5 | 耐震改修のため、翌年2月まで共同教育実験施設（旧プラズマ研究所）に校舎を移転。 |
| 2009 (平成21) | 6 | 安藤隆穂教授が日本学士院賞を受賞。 |



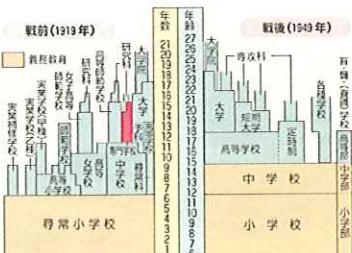
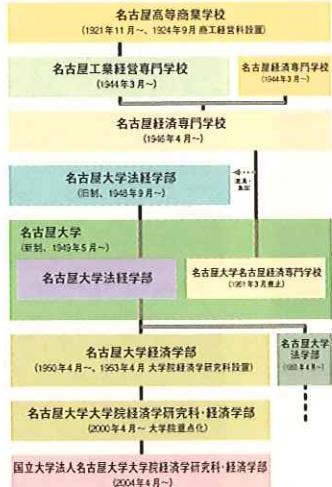
1. 名高商から名大経済学部へ —歴史とキャンパス—

名古屋高等商業学校(名高商)は、1921(大正10)年、全国六番目の官立(国立)商業専門学校として創立されました。設置場所に名古屋が選ばれるにあたっては熱心な誘致運動がおこなわれ、さらに設置経費の3分の1を愛知県と名古屋市が負担するなど、地元の大きな期待を担っていました。

名高商は、「剣ヶ丘」と通称されたのどかな土地が名古屋市の発展とともに急速に市街地へと変貌する中で、その特色ある学風によって多くの優秀な人材を経済界に送り出していきました。

その後、戦争によって工業経営専門学校への転換をよぎなくされたものの、戦後には名古屋経済専門学校(名経専)として復活しました。1951(昭和26)年に名経専は廃止されましたが、名古屋大学経済学部が施設・教員とともにその伝統を受け継ぎ、1959年に東山へ移転して現在に至っています。

名古屋高等商業学校の創立



戦前(旧制)と戦後(新制)の教育制度

名高商は旧制の専門学校に分類される。創立された1920(大正9)年における日本の高等教育機関(高等学校、専門学校、大学予科)への進学者は約2万2千人であり、これは同年18歳人口の2%程度にすぎなかった。大学へは、高等学校や専門学校などの卒業者が准進した。



多喜商の宣誓式を報じる多古屋新聞(1921年5月23日)

剣ヶ丘 —名高商のキャンパス—



名古屋高等商業学校全景(1933年) 中日新聞社提供

名高商の所在地は、設置された1920(大正9)年においてはまだ愛知郡呼続町大字瑞穂字川澄であったが、翌年8月の大合併で同町は名古屋市に編入された。当初、付近一帯は大根畠で、農家が点在するという地域であったが、その後10年で急速に市街地化が進んだ。

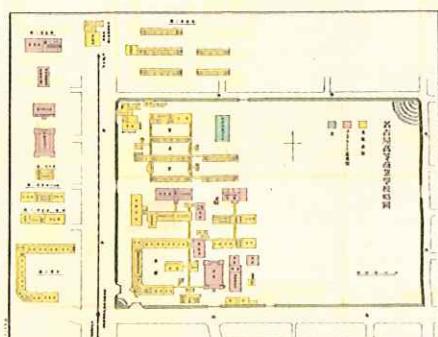


名高商の位置(名古屋市地図)



名高商の位置(付近地図)

現在は、名古屋市立大学川澄キャンパスになっている。すぐ近くにある同大学山の畠キャンパスには、旧制第八高等学校があった。



名古屋高等商業学校略図(1936年)

軍事教練のための銃器庫が建てられたのは翌年(1936)で、それまでは倉庫の隣にある倉庫を「銃器庫」として使っていた。



名古屋市域の変遷
(『新修名古屋市史』第5巻より)

戦争と名高商 —工業経営専門学校へ—



勤労奉仕(年月日不明)

1938(昭和13)年7月から、名高商の勤労奉仕作業が始まった。



取り外される名高商の表札
伊藤久雄氏提供

1944年3月、戦争に必要な工業を重視する政府の方針により、名高商は名古屋工業経営専門学校に転換した。在学中の学生が卒業するまでの移行措置として、名古屋経済専門学校が併置された。



武装して南京陥落祝賀行事に参加した名高生たち
(1937年12月12日)

南京陥落祝賀行事では、招魂社参拝後、名古屋市役所で他校と合流し、軍隊とともに熱田神宮に参拝して、夜は提灯行列に参加した。



1938年5月に建立された
初代校長渡辺貞聖の銅像



銅像は戦時に供出され、台座
しかなくなっている(1957年頃)



報国団国防部鉄劍道班

1940年11月、政府の命令により学友会⁶を解散し、名古屋高等商業学校報国団が結成された。部は班となり、例えば野球部は報国団鍛錬部野球班と改称された。

⁶部活動を中心とした親睦団体



尽忠報国塔
(1942年11月、学内に建立)

名大合流かビジネスカレッジか



名古屋経済専門学校正門



戦後、野本悌之助校長は、「本校は名は専門学校だが実質的には大学以上だ。…本校がすでにハーバード大学で実施されつつある新しい教授法…ケース・メソッド…を採用して好成績をあげつつあるこのゆき方は、いよいよ拡充強化しなければならない。これは総合大学の一学部としての画一的な講義では充足されない大きな問題である。これを単科大学の自由な立場から更に強化してゆくことが学制改革を意義あらしめるものと信じ、教授と生徒と私と三者が同步調でビジネス・カレッジの建設に進んでいる。」とコメントしている。



名古屋経済専門学校記念祭(1950年11月)

これが名高商(名経専)最後の学園祭となつた。



紆余曲折の末、名大に合流することになつたが、今度は学部構成が問題となつた。名経専は、二学部(法経、文)なら妥協するが、一学部(法経文)なら合流を拒否する姿勢をとつた。

合流後の学部構成をめぐる文書

名大経済学部としての再出発



名古屋大学桜山キャンパス(経済学部)航空写真



名古屋大学経済学部(桜山)正門



1963年頃の名古屋市立大学川澄キャンバス
(名古屋市立大学「名古屋市立大学50年の歩み」より)



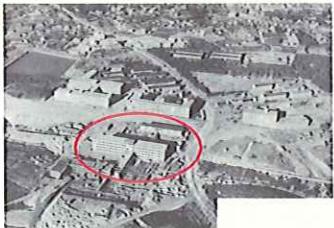
2000年の名古屋市立大学川澄キャンバス
(名古屋市立大学「名古屋市立大学50年の歩み」より)

1959(昭和34)年、東山キャンパスの経済学部校舎および法学部校舎などの建設と引き換えに、桜山キャンパスを名古屋市に譲渡する方法で、経済学部などの東山移転が実現した。桜山キャンパス跡地は名古屋市立大学となった。現在、当時の建物は残っていないが、この写真にはまだ名高商時代以来の建物が多く見られる。



名古屋大学経済学部(桜山)校舎(1959年春)

桜山から東山へ



東山キャンパス航空写真1(1958~59年頃)
朝日新聞社提供



東山キャンパス航空写真2(1965~66年頃)
朝日新聞社提供

経済学部校舎の外装はすでに完成している。同じ1959(昭和34)年、経済学部に4ヵ月ほど遅れて名城キャンパスから移転した法学部校舎は、まだ工事にかかるて間もない様子である。キャンパス中央の現在のグリーンベルトも全く整備が手付かずの状態になっている。

左の写真に比べると、豊田講堂(1960年完成)、文学部・教育学部(1963年移転)、教養部・大学本部・古川図書館[※](1964年移転・完成)などの建物が見られ、グリーンベルトも整地されている。また地域の市街地がかなり進展している様子も分かる。

※現博物館



グリーンベルトから見た経済学部校舎(1967~68年頃)



名古屋大学前のバス停から見た経済学部校舎(1965~66年頃)

2. 名高商の教育と研究 —実践主義と総合大学の雰囲気—

初代校長の渡辺龍聖は、第1次世界大戦後は国際経済競争の時代がくると考え、世界とわたりあえる高い能力と、教養豊かな紳士としての風格を合わせ持った国際経済人の育成をめざしました。

そのために、やるべき時にやるべきことをなせる人間を育てるための校是ともいえる「二大信条」が掲げられ、教養を重視するカリキュラムと、科学主義に基づいて実際から理論に到達することをめざす実践主義教育が行われました。

また、こうした教育を実現するため、全国から優秀かつ気鋭の教員たちが集められ、すぐれた外国人教師も招かれました。自由闊達な雰囲気のなか、商学を中心にしつつも幅広い分野の学術・文化が花開きました。

こうして名高商は、大学並みの水準と総合大学の雰囲気を持つとすら言われるようになったのです。

初代校長渡辺龍聖と「二大信条」



渡辺龍聖校長(1933年頃)

渡辺龍聖(1865-1945)は、現在の新潟県板尾市生まれ。東京専門学校(現在の早稲田大学)、帝国大学文科大学(現在の東京大学文学部)をへてアメリカに留学、ニューヨーク州のコネル大学で哲学博士号を取得した。1894(明治27)年に帰国後は、高等師範学校(現在の筑波大学)の教授(倫理学)、東京音楽学校校長などを歴任し、1902年からは7年にわたって、当時清国直隸省總督であった袁世凱の学務顧問を務めた。

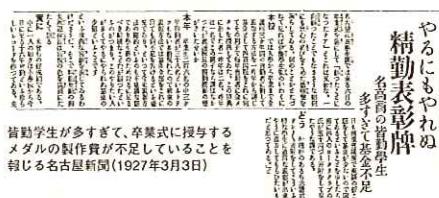


小樽高等商業学校(1914年)
小樽高商大学百年史編纂室提供

1911(明治44)年、渡辺はドイツ留学から急きよ呼びもどされ、新設された小樽高等商業学校(現在の小樽高商大学)の初代校長となった。名高商における渡辺の取り組みの多くは、この小樽高商時代が基盤になっている。



校長室に座る渡辺龍聖(1926年頃)



渡辺龍聖像(キタン庭園内)



渡辺龍聖の墓(興正寺)

1980(昭和55)年、キタン会が名高商創立60周年を記念して建立した。当初は名高商があった名古屋市立大学川澄キャンパス内に建てられたが、のち名大経済学部の中庭(キタン庭園)に移設された。

渡辺は1935年に借しまれつつ校長を退いたのちも名古屋市内に住み、名高商を見守り続けた。1945年7月、隣接する三重県桑名市で亡くなった。その墓は、名大東山キャンパスにほど近い八事の興正寺にある。

渡辺校長は、学生に「学生は学生らしくあること／学生は学生の本分を忘るな」という「二大信条」を示し、これらを学生の自主性に基づいて実践させた。病気等の不可抗力以外の理由では授業を決して欠席しないこともその一環で、授業出席率は98%を誇り、全国でも有名になった。



来校した昭和天皇をご案内する渡辺校長(1927年)

カリキュラムとその変遷

名高商の学科目(1921年2月)

| 年 度 | 英 語 | 第一学年 | | | | | | | | | | | | 第二学年 | | | | | | | | | | | | 第三学年 | | | | | | | | | | | |
|---------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---|--|--|--|--|--|--|
| | | 日本 語 | 英 文 | 数 学 | 理 科 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | | | | | | | |
| 1920/21 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1921/22 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1922/23 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1923/24 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1924/25 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1925/26 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1926/27 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1927/28 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1928/29 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1929/30 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1930/31 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1931/32 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1932/33 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1933/34 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1934/35 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1935/36 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1936/37 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1937/38 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1938/39 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1939/40 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1940/41 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1941/42 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1942/43 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1943/44 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1944/45 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |

渡辺校長の方針により、とくに第1学年では、国際的な経済人としての教養を身に付けるため、外国語を中心とする商業科目以外の一般的な科目にも多くの時間をあてている。また、それまでの商業専門教育ではあまり重視されてこなかった、商業実践や商品実験、商工心理学といった実践的な科目が積極的に取り入れられている。

名高商の学科目(1942年12月)

| 年 度 | 英 語 | 第一学年 | | | | | | | | | | | | 第二学年 | | | | | | | | | | | | 第三学年 | | | | | | | | | | | |
|---------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---|--|--|--|--|--|--|
| | | 日本 語 | 英 文 | 数 学 | 理 科 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | | | | | | | |
| 1942/43 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1943/44 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| 1944/45 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |

名古屋工業経営専門学校の学科目(1944年4月施行)

| 年 度 | 英 語 | 第一学年 | | | | | | | | | | | | 第二学年 | | | | | | | | | | | | 第三学年 | | | | | | | | | | | |
|---------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---|--|--|--|--|--|--|
| | | 日本 語 | 英 文 | 数 学 | 理 科 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | 工 業 | 工 芸 | 生 物 | 社 会 | 史 地 | | | | | | | |
| 1944/45 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |

修業年限が2年半に短縮された1942年度から、カリキュラムが大幅に改編された。学科目の整理統合が図られ、英語の時間数も減らされて、授業時間は週35時間から31時間となった。新設された「国史」「日本産業論」「東亜経済論」、不定時での特別講義や「鍛錬」などに戦時体制の影響が見られる。かつての名高商の特色が失われていった。

実践主義教育



「商業実践」の実習(1936年頃)



商工心理学の実験(1929年頃)

商工心理学は、商品の生産や販売、購買に関わる人間の適性や心理を研究する、当時最先端の学問分野であった。写真に写っている担当教員は古賀行義教授。

「剣菱運輸」や「剣菱銀行」などの模擬会社をつくるて実習した。



印刷工場で作業をする学生たち(1928年頃)

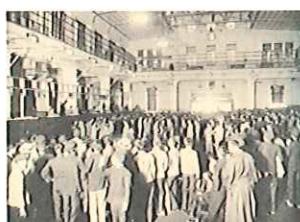
名高商の学内に「能率実践工場」として印刷工場が建てられた。奥の方には印刷機械が見える。学友会雑誌「剣菱」などはここで印刷されていた。



授業風景(海外事情、1933年頃)



タイプライティングの授業(1929年頃)



名古屋株式取引所を見学する名高生たち
(1933年頃)

「名古屋高商は大学だ」

—総合大学の雰囲気—



応用化学実験(1925年頃)



化学(商品)実験館(1929年頃)



実験室の近藤良男教授(1925年頃)



産業物理学の授業1(1933年頃)

赤松要教授は、名高商から東京商科大学(現在の一橋大学)に移った直後の1939(昭和14)年、学友会誌「剣陵」に寄せた文章で、「剣陵」を離れてみて剣陵の価値がわかる。北陸の恩友〇教授は名古屋に来るたびに「名古屋高商は大学だ」と言った。それは決して尙世辞だけではない。実際に剣陵学園は商業経済の単科大学にあたるのみでなく、総合大学として偉容を有することは全く驚異に値する。」と記した。

※剣陵=名高商
草薙劍に因んで命名された。



研究室の小原亀太郎教授(1925年頃)



産業物理学の授業2(1933年頃)

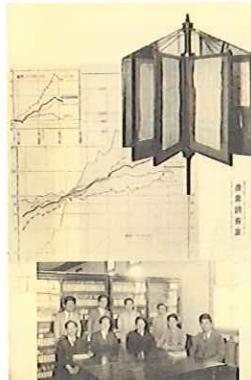
産業調査室

—「名高商生産指数」で世界に知られる—



黒田之助教授
(1929年頃)

統計学、交渉論、商業実践
などを担当した。



産業調査室(1934年頃)



赤松要教授
(1926年頃)

26歳で社任し、1939年に
東京商科大学(現在の一橋
大学)に転任するまで、18年に
わたって名高商で教鞭をとつ
た。戦後は、毎行形態論や
会員販賣で世界経済学者とし
て世界的に活躍した。



酒井正三郎講師(当時)
(1928年頃)

のち1949年から51年に
かけて、名高商最後の校長
を務めるとともに、新制
名古屋大学の初代経済学
部長(当時は法科大学院長)と
なった。



宮田喜代蔵教授
(1928年頃)

経済原論、貿易論、取引理論
などを担当した。



E. F. ペンローズ
(1928年頃)

英語・商業学・商業史を担当
した外国人教師ベンローズ
も産業調査室に参画した。
名高門内にはほかにも多くの
外国人教師が招かれ、その
高い研究水準をえていた。



国際経済政策研究センター組織図

産業調査室は、敗戦後の一時中断
をへて、1950年に名大経済学部
で再発足し、現在は大学院経済学
研究科附属国際経済政策研究セン
ターとして、幅広い資料収集と学
術研究をおこなっています。



郡教授の
研究報告を配る



前年に設置された産業調査室の盛んな
活動ぶりを報じる名古屋新聞
(1927年3月2日)

名高商の教師たち



赤松要教授とそのゼミ生たち(1934年頃)



国松直第二代校長(1939年頃)



河合逸治教授
(1929年頃)



G. C. アレン
(1922~24年頃)

22歳で来日し、英語と商業史を担当。名高在任は2年半だけであったが、イギリス帰国後はイギリスにおける日本経済研究の先駆けとなり、多くの著作を残した。第二次大戦後、イギリス外務省の日本担当官として、日本に眞理な対応策を提唱委員会に進呈し続けた。日本研究や日英友好に大きく貢献したアレンに対し、日本政府から1981年に勲三等瑞宝中綱章が、80年に医療文化基金賞が贈られた。



前馬治一教授
(1934年頃)

商業論述、倉庫論述、信託論を担当。



野本悌之助教授
(1925年頃)

簿記、会計学、経済財務などを担当。のち1946年5月から1949年7月まで、各任専の教員を務めた。



A. アシュトン

英語、商業史、商業論述を担当。



高島佐一郎教授
(1933年頃)

財政学、経済原論、銀行論などを担当。



小原久太郎教授
(1926年頃)

商芸理化学、商品実験などを担当。



近藤良男教授
(1928年頃)

理化学、工業原料学などを担当。



古賀行義教授
(1929年頃)

商工心理学、管理学などを担当。



E. F. ペンローズとその家族



郡 菊之助教授とゼミ生たち(1936年頃)

3. 名高商の学生生活 —文武両道の「粋な高商さん」たち—

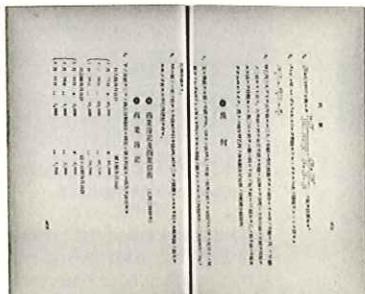
難関の試験に合格して入学してきた名高商生は、「二大信条」の下、身なりを整え、まじめに授業に出て勉強する毎日をおくりました。

しかし同時に、部活動にも熱心に取り組みました。運動部は東海地方を代表する強豪として地域のスポーツを盛り上げ、文化部は多様で格調高い名高商文化を担いました。学生の約半分は学校の構内にある嚶鳴寮に入ってともに生活し、比較的自由な空間の中で濃密な時間をすごしました。

こうした名高商生たちは、学力で厳しく選抜されたエリートでありながら運動もできる文武両道で、しかも蛮カラ風ではない、スマートな印象を地域の人々に与えました。粋な高商さん—これが名高商生のイメージでした。

そして卒業後、彼らは東海地方にとどまらない、日本経済の中心となつて活躍したのです。

入学した若者たち



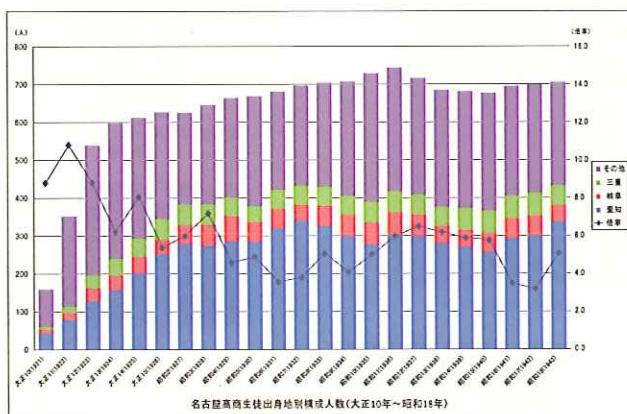
名高商の1923年度入試問題(抜粋)

ハンドオンコーナーで、1923年度入試の全問題が閲覧できます。



入試当日の受験生控室(1936年頃)

入学(受験)資格は、中学校または甲種商業学校を卒業した男子とされ、女性の入学は認められていなかった。おおむね17~18歳で入学した。



名高商の在学生数(本科)と出身地、および入試倍率

愛知県出身者が40%前後、これに岐阜県と三重県の出身者を加えると60%前後であった。その他の中では、静岡、京都、広島、岡山、長野、新潟、兵庫の出身者が比較的多い。入試倍率は、創立当初は10倍前後、それ以後もおおむね5倍前後と、第八高等学校と変わらない競争倍率の難関校であった。1944年と45年は、名古屋工業経営専門学校への転換のため生徒募集がおこなわれなかつた。戦後の競争倍率は不明。

嚙鳴寮での生活



嚙鳴寮(1928年頃)

名高商の寄宿舎は学内にあり、南・中・北・東・翼の五つの寮舎を「嚙鳴寮」と総称した。「嚙鳴」の語は「詩経」からの引用で、鳥が友を求めて鳴き交わすさまをいう。嚙鳴寮は、戦後名大の寮となり、昭和区高峰町に移転したのちも名前をそのまま継承した。現在も「国際嚙鳴館」としてその名をとどめている。



嚙鳴寮第3期寮生天長節記念写真
(1923年)

寮は「本校の教育と相俟て生徒の教養を完うする所」とされ、自宅から通う者以外、入学して1年は寮に入ることが義務づけられていた。



寮生活(1933年卒業アルバムより)



「嚙鳴寮生徒昇降口」(上)と寮の廊下(下)
1929年頃



嚙鳴寮でのファイヤーストーム

ファイヤーストームは、名大祭で昨年までおこなわれていた。



勉強に没頭(1928年頃)

スポーツと文化①



1924年に学生横綱となった
相撲部の稽古登



清川正二
(全メダル獲得の
レース直後の写真)



ロス五輪における名高商在学生
清川正二の金メダル獲得を報じる
名古屋新聞(1932年8月14日)



名高商の各部が獲得してきた優勝旗・
トロフィー・盾(名経専1951年卒業アルバムより)



胸にマーキュリーの銀球(サッカー)部
(1928年頃)



(陸上)競技部(1939年頃)



多くの観衆が待つグラウンドに登場する
野球部員たち(1929年頃)



「名古屋高商柔道部本舎」
(全国高等専門学校柔道大会の宿にて、1936年頃)



全国高商排球選手権大会でプレーする
排球(バレーボール)部(1936年頃)

スポーツと文化②



各部が一堂に介した学生会の会議(1936年頃)

学生会は、在校生を通常会員、職員を特別会員、卒業生を会友とし、会員相互の親睦を深め、心身を鍛えることにより、堅実な校風をつくることを目的とした。運動部が中心で、文化系のクラブの多くは所属しておらず、運動系のクラブも属していないものがあった。



市街に練り出してのデモンストレーション
(高校15周年記念祭にて)



刷り上った「剣陵」と文芸部
(1936年頃)

学友会誌「剣陵」の
編集は文芸部が担
当していた。印刷は
学内の能率実践工
場でおこなわれた。



中等学校小学校陸上競技(1926年)

プロスポーツが発達していない戦前においては、高等教育機関がスポーツ文化の中心であつた。名高商は、当時数少ない昭和初期には名古屋唯一の公認トラックを持っており、これを他団体に貸したり、中等学校の競技会を開催するなど、スポーツ普及事業の一翼を担っていた。



若菜会(1927年頃)

中央に写る赤松要是、学術的に名高商を牽引するとともに、初代文芸部長として『剣陵』の創刊にあたったり、教員と学生有志による短歌会「若菜会」で活動したり、著書「ヘーゲル哲学と経済科学」(1932年)を出版して名古屋ヘーゲル研究会を催すなど、幅広い名高商文化の中心になった。



全国高等専門学校学術講演大会
(名高燕講演会主催、1928年名高商卒業アルバムより)



バイオリンクラブ(1925年頃)

いき 「粹な高商さん」の学園生活



通学風景(1926年頃)



生徒控室の売店(1933年頃)



「カンカン帽」をかぶって記念写真(弓道部、1933年)

制服は黒ラシャの学帽と黒セルの詰め襟服とされていたが、夏にこの格好で通学するのは大変であった。学生の陳情をうけた渡辺校長は、カンカン帽は紳士らしい心を養成するとして許可し、霜降りの服は木綿に限り略式制服として認めた。



卒業の寄せ書き(1934年)

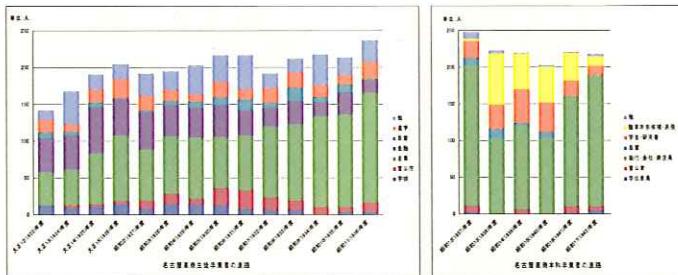


飲食店でくつろぐ(名経育時代)



社会の動きを読む
(生徒控室新聞閲覧所、1934年頃)

卒業生たちの進路



名高商卒業生(本科)の進路(1923~36年度)

名高商卒業生(本科)の進路(1937~42年度)

企業(会社・商店)への就職が多く、しかも年を経るごとに増加し、1936年には60%以上を占めるに至っている。就職の地域は、当初は約半数が愛知県内であったが、だいにその割合は減り、1936年には15%を割っている。進学はおむね10%前後で、主な進学先は東京商科大学(現在の一橋大学)などの商業単科大学であった。

| 順位 | 学校名 | 存在年 | 社員の人数 |
|----|------------------|-----------|-------|
| 1 | 東京(帝國)大学 | 1877~ | 167 |
| 2 | 京都(帝國)大学 | 1697~ | 55 |
| 3 | 慶應義塾大学 | 1890~ | 47 |
| 4 | 東京商科大学(東京)高等商業学校 | 1887~1962 | 40 |
| 5 | 早稲田大学 | 1902~ | 30 |
| 6 | 神戸商業大学(神戸)高等商業学校 | 1902~1962 | 22 |
| 7 | 東京工業大学(東京)高等工業学校 | 1901~ | 17 |
| 8 | 九州(帝國)大学 | 1911~ | 15 |
| 9 | 東北(帝國)大学 | 1907~ | 12 |
| 9 | 名古屋高等商業学校 | 1920~1951 | 12 |

名高商(名経専)が単独で9位タイにランク入りしている。他大学は全学部の合計、高商も後身の単科大学を合わせた数であり、送り出した卒業生の数は名高商よりはるかに多い。このことを考慮すると、名高商の数はきわめて高い数字といえる。

東証一部上場企業社長の卒業大学ベスト10
(『週刊ダイヤモンド』1969年7月7号より)



第二回卒業生記念写真(1925年)

4. 名大経済学部への 継承と発展

名古屋大学経済学部は、1948(昭和23)年に旧制名古屋大学法経学部として設置され、新制移行後の1950年に経済学部となりました。

名経専そのものは、1949年に新制名古屋大学へ包括され、51年に廃止されますが、教員の一部は経済学部でも教べんをとり、かつて「剣ヶ丘」と呼ばれた桜山の校舎も経済学部が使用しました。そして、名高商の特色であった自由な校風と実践主義、それらによって生み出された高い水準の学問と教育が経済学部に受け継がれました。

名高商を前史に持ち、桜山に孤立していたこともあって、単科大学の雰囲気もあった経済学部ですが、1959(昭和34)年に東山に全面移転し、総合大学の学部として本格的に歩みはじめました。これは、施設が各地に分散する「タコ足大学」から名大が脱却する一步でもあったのです。

桜山時代



1954年(新制第2回)経済学科卒業生



ストーブを囲んで(1957年頃)



求人「幼少ニシテ貧困ニ耐
工学葉劣等ナレドモ頑張明
明ナル者ヲ求ム」(1958年
卒業アルバムより)



学内の売店(1957年頃)



教授会の様子(1954年頃)



名古屋大学豊川分校(教養部)



名古屋大学教養部(瑞穂キャンパス)



事務室

1949～51年度には、豊川(元岡崎高等師範学校の校地)にも教養部があった。経済学部生の場合、49年度は大学が学生を瑞穂と豊川に分け、50～51年度は1年生が豊川、2年生が瑞穂で学んだ。

1963年度までの1～2年生は、経済学部のあった桜山からほど近い瑞穂キャンパス(元第八高等学校の校地、現在は名古屋市立大学山の畑キャンパス)の教養部で学んだ。

新天地での学生生活



ソフトボール



「ビフテキ ¥70.-
ラーメンでガマンしよう」
(1961年卒業アルバムより)



学生会館食堂



松坂屋の前を「阿波おどりアワパレード」で
行進中(名大祭仮装行列)



「文部省認定 狂育という教育」
(名大祭仮装行列、L1-33)



名大祭のゼミ企画



体育祭



名大祭真打前ステージ「珍芸会」参加の面々



雨でぬかるんだ山手道(1961年頃)

移転当初は山手通も舗装が十分ではなく、雨が落るとすぐにぬかるみドロドロになった。

東山経済学部校舎点描



2階廊下



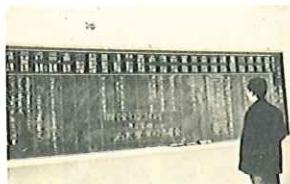
玄関(写っているのは当時の
経済学部事務職員)



第4教室



図書室



ゼミナール掲示板



今も残る中庭(キタン庭園)
の小池にて



中庭(東側)の噴水



計算室



学生控室



図書室

教員と学生たち①



坂野谷九十九教授
(第四・七代学部長、
1958.10~61.10, 65.6~66.10)



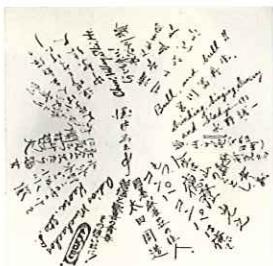
酒井正兵衛
(筆名=酒井正三郎)教授
(初代学部長、1949.7~52.10)



四方博教授
(第二代学部長、1952.10~55.10)



ゼミ風景(坂野谷ゼミ)



酒井セミの寄せ書き(1959年卒業生)



凌辺信一教授
(第三代学部長、1955.10~58.10)



ゼミ風景
(北川一雄ゼミ、1959年頃)



水田洋ゼミ(1961年卒業生)



高田馨ゼミ(1958年卒業生)

現在は、経済学部生の4割近くが女子
学生だが、当時女子学生はほとんど見
られなかった。

教員と学生たち②



水田洋教授
(第八代学部長、1966.10~68.10)



末松玄六教授
(第五代学部長、1961.10~63.10)



北川一雄教授
(第六代学部長、1963.10~65.5)



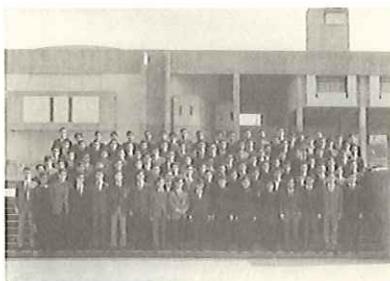
豊田講堂前で「シェーク！」
(上野裕也ゼミ、1966年卒業アルバムより)



豊田講堂前で一列になってポーズ
(山崎研治ゼミ、1964年卒業生)



末松玄六ゼミのコンバ(1964年頃)



卒業記念写真(1966年3月卒業生)



汗にうだりながらの資料整理
(塙沢君夫ゼミ、1961年)

赤松 要(1896~1974)の 「雁行形態論」とハイデルベルク留学



1. 「雁行形態論」とヘーゲル哲学

赤松要の「雁行形態論」は、1980年代後半以降、東アジアの発展モデルとして世界的に注目を集めるようにになった。この雁行形態論は1935年と1937年の2つの論文(展示)によって発表されたが、その国際的展開を視野に入れたダイナミックなモデルは、ヘーゲル哲学の影響を強く受けた誕生した。彼は、1925年5月～26年1月まで、かってヘーゲル(1770～1831)が教授に立ったハイデルベルク大学で哲学を学んだ。

2. ドイツ留学

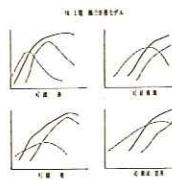
赤松要是、1921年4月、東京高等商業学校(現、一橋大学)専攻部を卒業して 名古屋高等商業学校に講師着任、翌1922年11月に教授昇格の後、1924年3月からドイツ、イギリス、アメリカへ留学(当初2年間で発令、ただし、延長して1926年7月アメリカより帰国)した。

ドイツでは、ハイデルベルク大学に留学しヘーゲル哲学を学んだが、その期間は1925年5月からフランスに向かう1926年1月までの8ヶ月であった。

【資料3】 大学町ハイデルベルクの街並、右上端の黒い星状の建物が大学本館。その辺、多くの建物が大学である。



【資料4】 赤松要が本人の書類に載せた雁行形態の基本モデル



出所: 赤松要[世界経済論]国元書房、1965年、174頁より。

【資料2】 雁行形態論を紹介する国連貿易開発会議[貿易と開発報告](1996年版)の一節



出所: UNCTAD (1996) Trade and Development Report 1996, p.75より。

【資料4, 5】 現在する後の住んだHundschusheimer Landstrasse 35の建物。赤松要是この4階建ての建物の、窓の飾られた2階の奥の奥の間に住んだものと思われる。1階のアーチ型の入り口上に、35番地の数字が確認できる。



3. 生年の不思議

赤松は自筆の履歴書、学籍申請書で生年を1897年8月7日と記している。だが、彼の生年とされる明治29年は1896年である。本年6月の調査によって生年における1年の違いが明らかとなった。その理由は現在のところ不明である。

【資料6】 赤松自身がハイデルベルク大学に提出した学籍登録申込書(1925年4月30日付。受取料目が哲学となっている。)



【資料7】 赤松要がハイデルベルク大学に提出した自筆の履歴書(1925年2月27日、ペルリンとおり、1925年4月までペルリンに滞在していたことがわかる。)



■追加展示文献

1. 我が国羊毛工業品の趨勢(1935.7) 商業経済論 第13号
2. 吾国經濟發展の總合併訂法(1937.7) 商業経済論 第15号
3. 経済白書(平成6年版)
4. 世界經濟白書(平成6年版)
5. UNCTAD (1996) Trade and Development
6. 「世界經濟論」国元書房、1965年、
7. 赤松要追悼論文集「學問焉路」
8. 赤松要歌集「わが旅路」

水田 洋

~91歳にして、いまなお第一線で活躍する アダム・スミス研究の世界的第一人者~

(略歴)

1919年 9月 東京都生まれ
1941年12月 東京高科大学（現一橋大学）卒業
1942年 1月 財團法人東亞研究所入所
1942年11月 陸軍嘱託（第16軍監督部付）
1946年 6月 復員
1946年10月 東京高科大学特任准教授
1949年12月 名古屋大学法政学部助教
1954年10月 British Council Scholar（グラーズゴワ大学）（～56年5月）
1958年 2月 名古屋大学経済学部助教（66年10月～68年10月、経済学部長）
1983年 4月 名古屋大学定年退職、名古屋大学名誉教授
1998年 1月 日本学士院会員（現在に至る）



水田 洋

(主要著作)

『近代人の形成』（東大出版会、1954）
『アダム・スミス研究』（未来社、1968）
『Adam Smith's Library』（Clarendon Press, Oxford, 2000）
『思想の基礎概念』（名大出版会、2000）
『新精・社会思想小史』（ミネルバ書房、2006）
『アダム・スミス集』（ミネルバ書房、2009）

ほか多数



(主要貢献)

ホップス「リヴァイアサン」全4巻（岩波文庫、1954～1955）
マルクス、エンゲルス「共産党宣言・共産主義の諸原理」
（講談社文庫 1972／2008）
アダム・スミス「道徳感情論」
（筑摩書房、1973、岩波文庫、上・下、2003）
エンゲルス「空想から科学へ・社会主義の發展」（講談社文庫、1974）
『アダム・スミス哲学論文集』（共訳、名大出版会、1993）

アダム・スミス『国富論』全4巻
（杉山忠平訳、水田洋監訳、岩波文庫、2000～2001）
パーク「フランス革命についての考察」上・下
（共訳、中央公論新社、2002～2003）
『アダム・スミス修辞学・文学論叢』（共訳、名大出版会、2004）
アダム・スミス『法学論叢』（岩波文庫、2005）

ほか多数

(思想史研究の世界的リーダーとして)

水田名譽教授は、国内外における思想史研究の発展に巨大な影響を与えて続けている。すぐれた論文・研究論のみならず、多数の翻訳作品を送り出し、スミスの戯画目録に象徴される独創的方法を通じて、さまざまな形で思想史研究の視野を広げてきた。卓抜した業績は高く評価され、2001年には「国際18世紀スコットランド社会生涯業績賞」を受賞（写真右）し、国内では、社会思想史分野で初となる日本学士院会員に選出された。

教育者としても、世界をリードする独創的研究を構想し遂行しうる数多くの研究者を直接・間接に育ててきた。



2009年に、フランス自由主義研究によって日本学士院員を受賞した安藤隆穂等研究院副院長・経済学研究科教授も、そうした弟子の一人である。
(写真左は、安藤教授と授賞式会場で)



(膨大な蔵書と水田文庫)

右の写真は、見るものを圧倒するご自宅の書庫である。これは、ほんの一部であり、その量たるや筆舌に尽くしきたい。近代思想の原典は言うまでもなく、古典から研究書まで所狭しと並んでおり、まるでちよつとした図書館のようである。さらに驚くべきことは、ご本人がそれをの本の所在を正確に把握していることである。



この夏、20,000円に及びこの蔵書のうち、7,000円が「水田文庫」として、名古屋大学附属図書館に収載された。そのうち、2,000円あまりが古典の原典である。

それらが並ぶ書庫に一步踏み込むとき、その量もさることながら、水田名譽教授の達筆もなく壮大な研究構想に圧倒されることになるだろう。



末松 玄六 <1910-1993年> ～中小企業研究のパイオニア～



末松 玄六

(略歴)

明治43(1910)年 岐阜県生まれ
昭和12(1937)年 東京商科大学(現・一橋大学)卒業
山口高等商業学校教授、名古屋経済専門学校教授、等を経て、
昭和23(1948)年 名古屋大学法政学部の創設とともに、教授就任
昭和36(1961)年 名古屋大学経済学博士
昭和37(1962)年 第5回日本経済図書文化賞特別優秀賞を受賞
昭和49(1974)年 延年により選抜、名古屋大学名誉教授の称号授与
その後、愛知大学教授、名古屋女子高科短期大学教授
昭和51(1976)年 永禄褒章を授与
昭和57(1983)年 黙二等瑞宝章を授与
平成 5(1993)年 永眠



(研究業績)

専門分野：中小企業経営論　企業の最適経営規模に関する研究
主な研究成果：

1943年に刊行した『最適工場経営論』(同文館)において
企業の最適規模概念を日本で最初に導入し、この概念は戦後
の我が国中小企業の復興ならびに振興の理論的支柱となっ
た。その後も企業の最適経営規模について多くの実証分析を行
い、「中小企業成長論—中小企業の成長に関する経営経済
学的研究」(1961年、ダイヤモンド社)により中小企業の成長
可能性を論じ、第5回日本経済図書文化賞特別優秀賞を受
賞した。

また、末松名義教授で翻訳したE.T.ベンローズ「会社成長の指標」(初版第2版、ダイヤモンド社)は、経営学の発展に
大きな足跡を残した不朽の名作として知られている。

こうして末松先生に贈る名古屋大学経済学部の中小企業研究は、その後故岸澤芳太郎名誉教授ならびに小川
英次名誉教授へと引き継がれ、日本の中小企業研究の一拠点となる壁を築いた。



緑澤 英太郎



小川 英次

(社会貢献)

末松先生は学会のみならず、政府の中小企業政策に関する審議会などにおいても長年に
わたりて指導的な役割を果たし、産業界の発展にも尽力した。とりわけ、先生の講演会は漫談
調で絶大な人気があり、「達才よりもおもしろかった」と当時を傾かしむ年配の経営者は多く、
身振り手振りを交えた講義は笑いが絶えず楽しかったとの思い出を語る卒業生も数知れない。

(末松文庫)

先生が長年にわたる研究生活の中で収集した貴重な蔵書約7,000冊は、ゼミ生の卒業論
文とともに、新東工業株式会社(愛知県豊川市)に寄附され、末松文庫として保管されている。



(パネル制作：経済学研究科准教授 山田基政)

二代続いた名著の翻訳 — 塩野谷九十九と塩野谷祐一

20世紀最大の経済学者、ジョン・メイナード・ケインズの著書、「雇用・利子および貨幣の一般理論」は、1936年に出版され経済学の世界に革命を起こした。マクロ経済学の誕生である。



塩野谷 九十九



ジョン・メイナード・ケインズ

この名著をいち早く1941年に日本語に翻訳したのが、横浜商業専門学校教授塩野谷九十九（1926年名島商卒、30年東京商大卒）であった。「一般理論」は難解な事で知られ、訳者の苦労は想像できるところである。この翻訳によって塩野谷は日本の経済学会に大きな刺激を与えるとともに、自分自身、ケインズ経済学研究の推進者としての地位を確立するのである。

その後、塩野谷は、ケインズ関連の著作を次々と翻訳する。代表的なものを、別冊すると、『[ケインズ伝] (R.F.ハロッド)』、『[ケインズ入門] (S.E.ハリス)』、『[ケインズ時代] (R.リーキッシュマン)』、『[貿易] (R.F.ハロッド)』など。

1943年、塩野谷は名古屋高等商業学校教授に就任する。名古屋は後に名古屋大学経済学部へと発展するが、ここにおいて塩野谷は、多くの優秀な人材を育成した。経済学者を例にとれば、辰田耕夫（55年卒、名古屋大学名譽教授）、水谷研治（56年卒、中京大学名譽教授）などがあげられる。また、実業界では、清水良之（55年卒、元十六銀行頭取）、花田賀（54年卒、元岐阜銀行頭取）、官界では、田中博秀（56年卒、元労働省労働研究所所長）などがあげられるであろう。



辰田 耕夫



水谷 研治



＊特別教務の称号授与式の写真
祐一氏（右）と濱口名大経営（左）

さて、ケインズ全集の1冊として、1973年に *The General Theory of Employment, Interest and Money* がイギリスで発刊されたことに伴い、九十九による新訳が登場するはずであった。しかししながら、九十九が既に倒れたときの祐一（53年名大経済卒、一橋大学名譽教授、2010年名古屋大学特別教授）がその訳文を完成させてるのである。

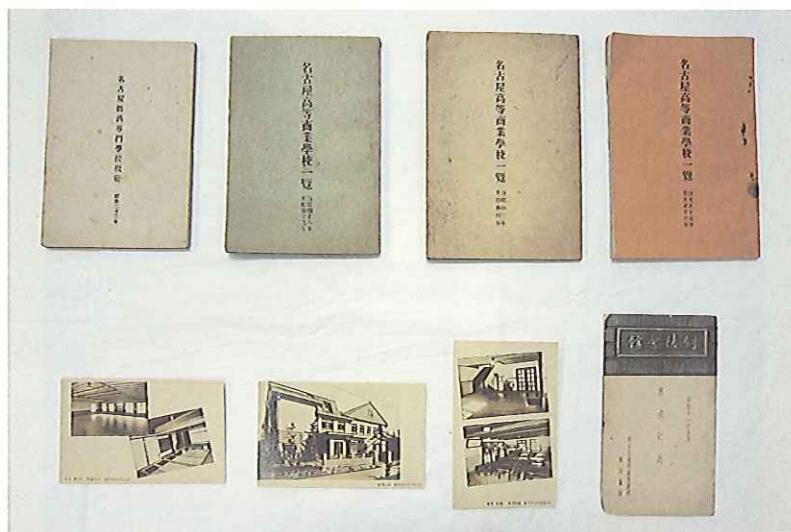
展示文献：

1. ケインズ著・塩野谷九十九訳「雇用・利子及び貨幣の一般理論」、
翻正再版、東洋経済新報社（1942年）。
2. ケインズ全集第7巻「雇用・利子および貨幣の一般理論」、塩野谷
祐一訳、東洋経済新報社（1983年）。

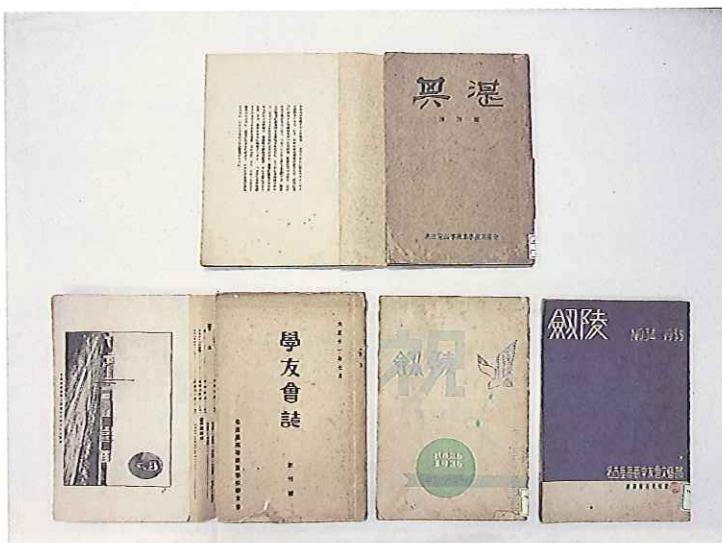
（企画制作：経済学研究科教授 岡村隆平）



ケース 1-1



ケース 1-2



ケース 1-3



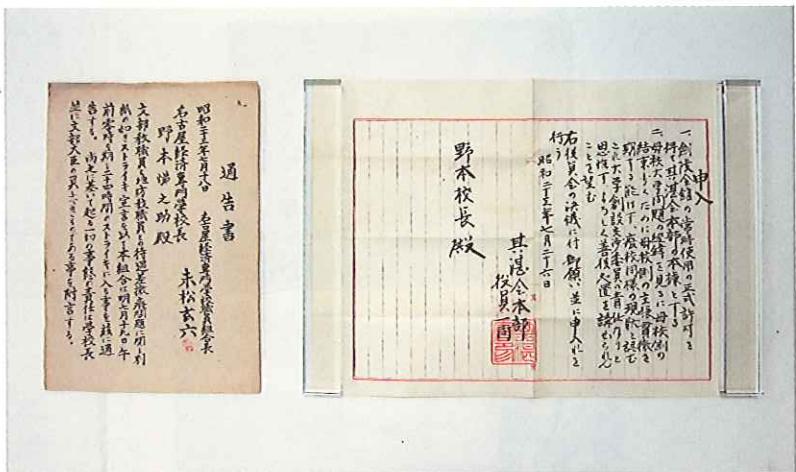
ケース 2-1



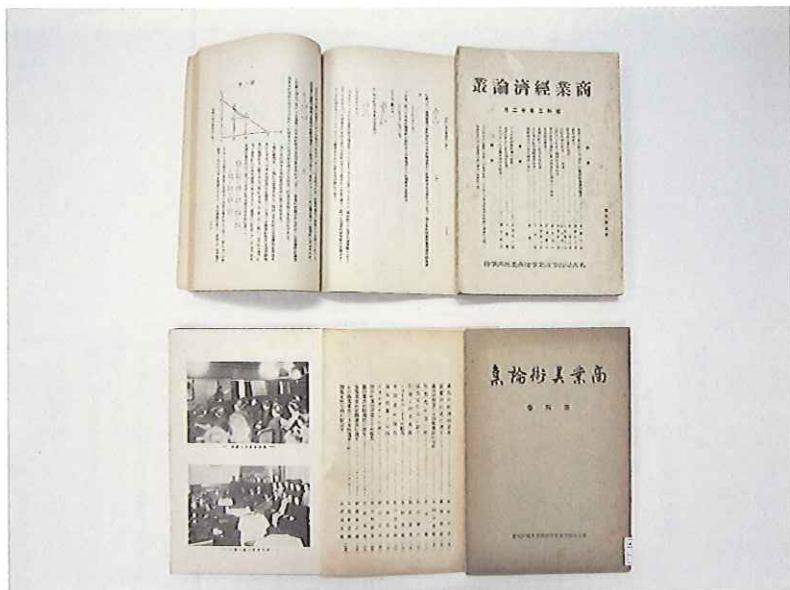
ケース 2-2



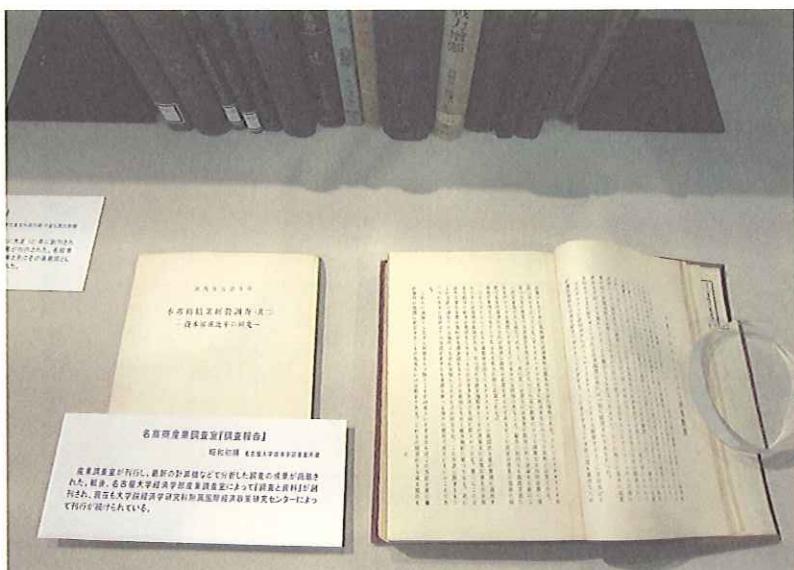
ケース 3-1



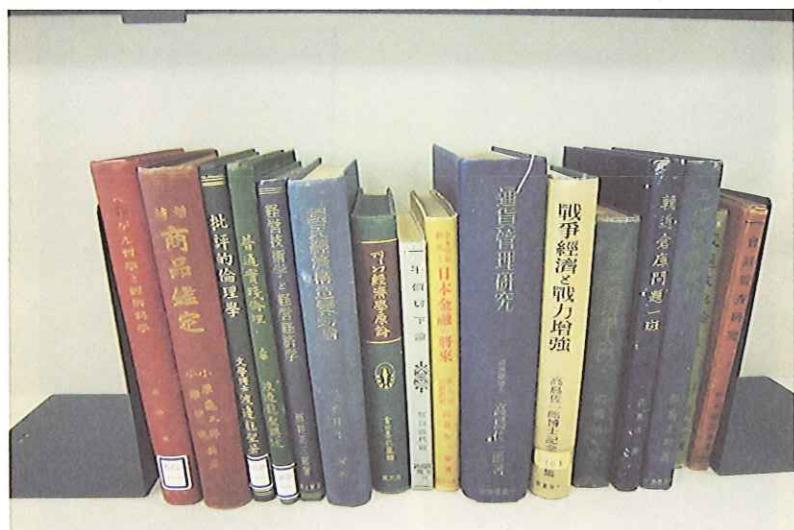
ケース 3-2



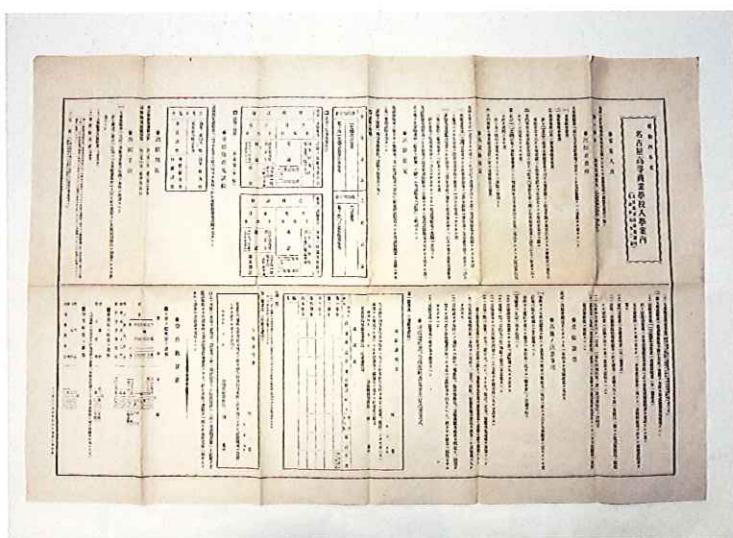
ケース 4-1



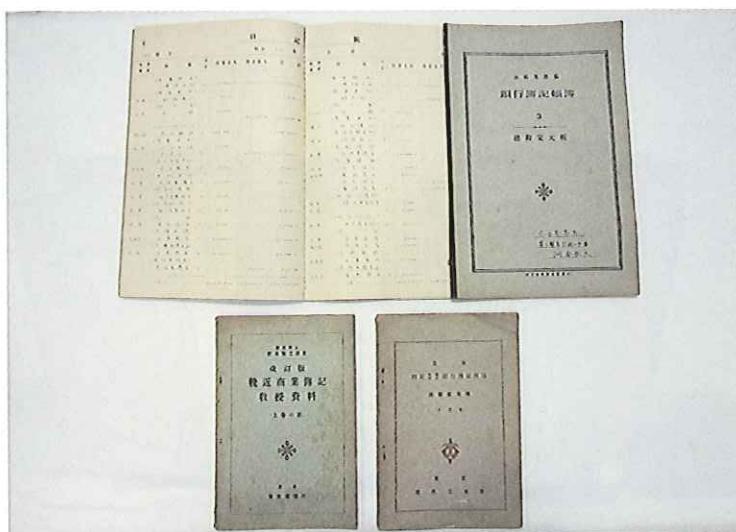
ケース 4-2



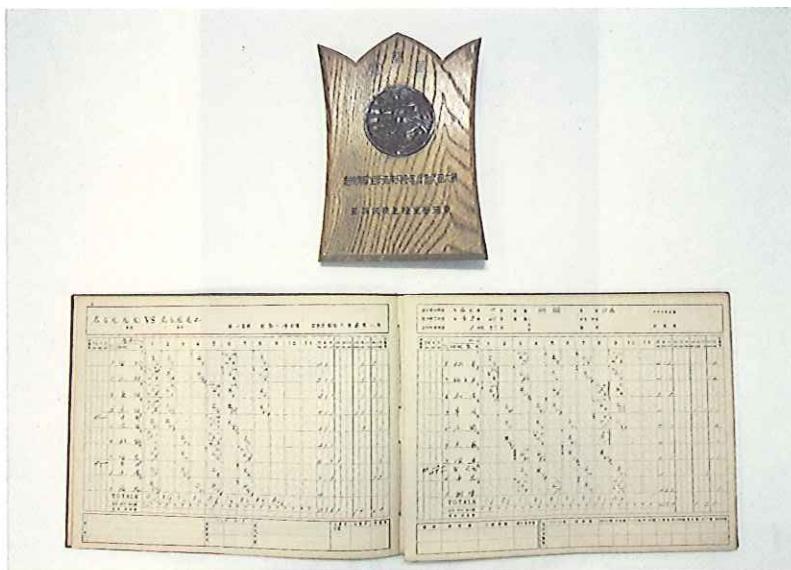
ケース 4-3



ケース 5-1



ケース 5-2



ケース 6-1



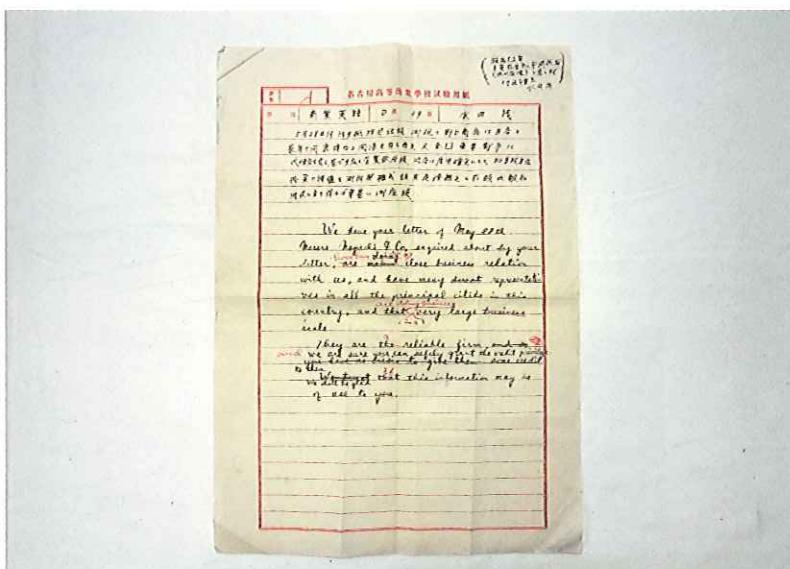
ケース 6-2



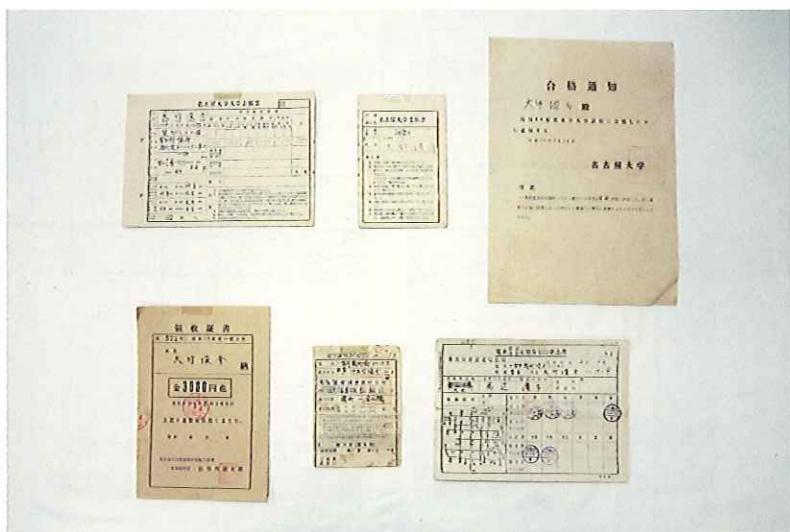
ケース 6-3



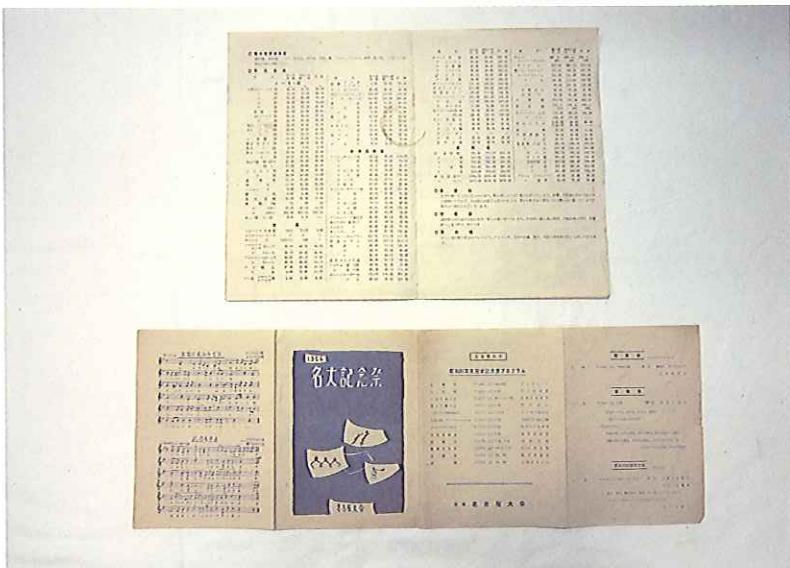
ケース 6-4



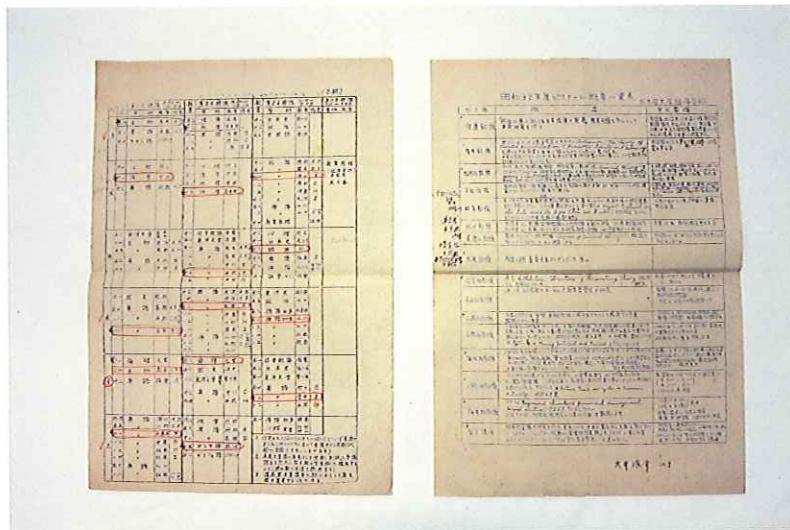
ケース 6-5



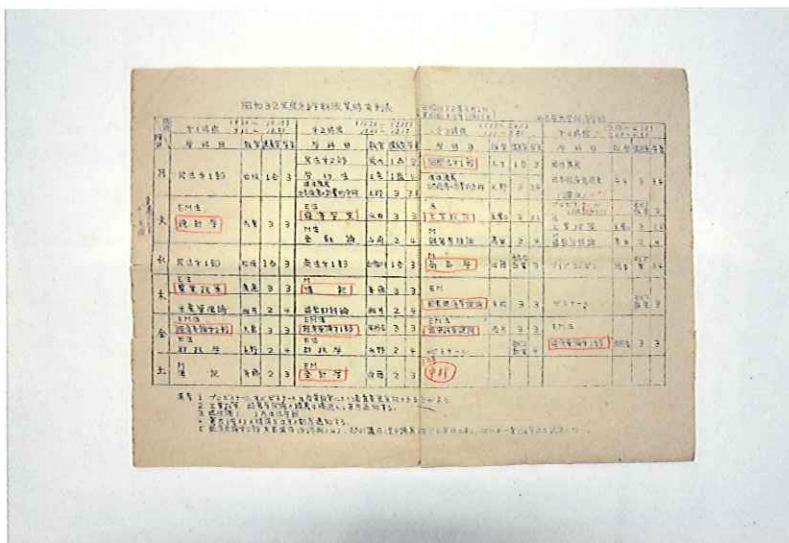
ケース 7-1



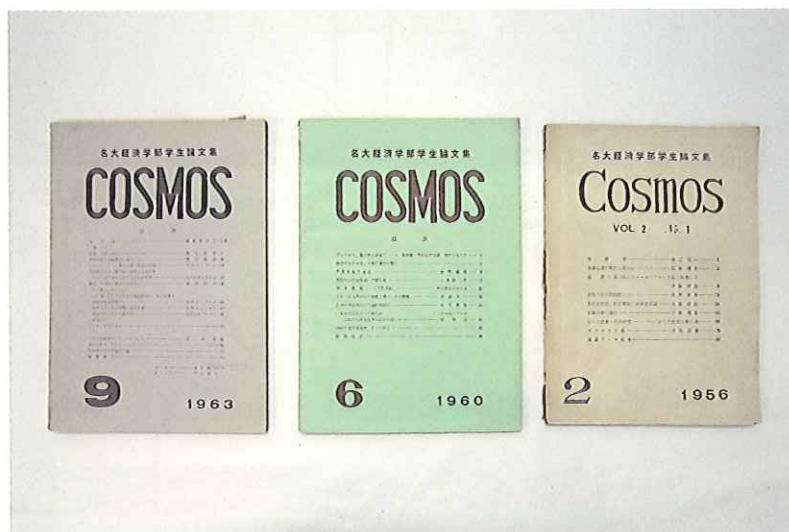
ケース 7-2



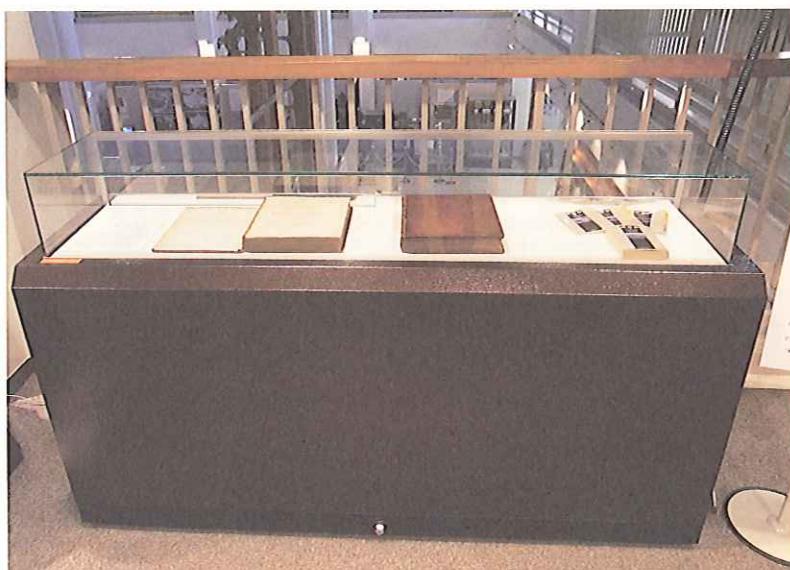
ケース 8-1



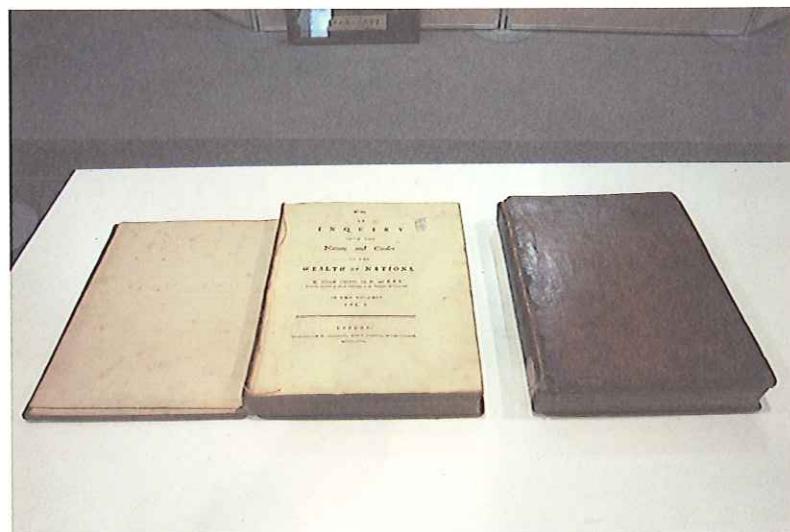
ケース 8-2



ケース 8-3



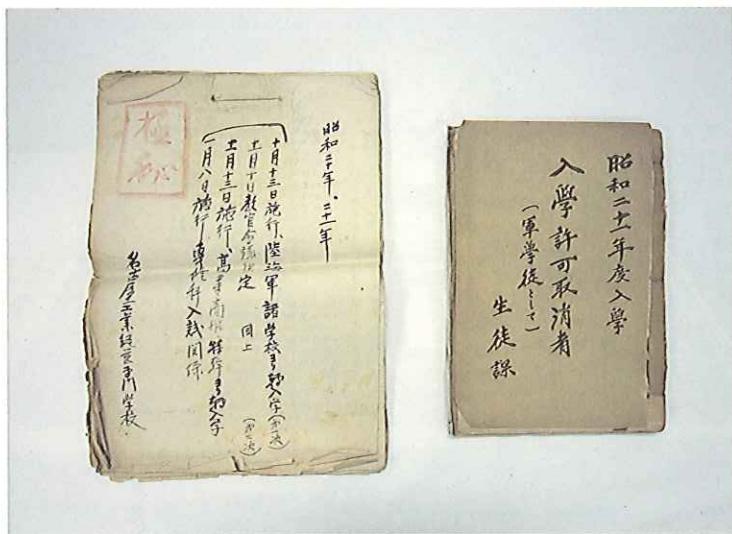
ケース 9-1



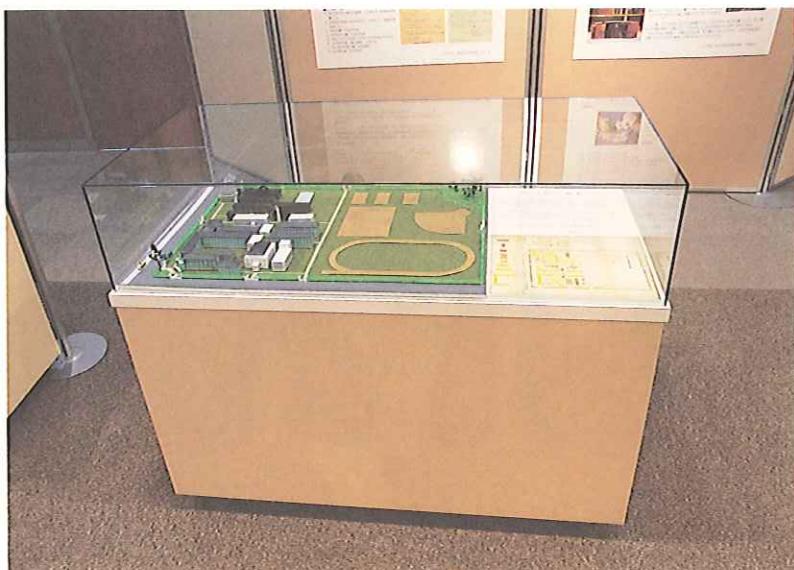
ケース 9-2



ケース 10-1



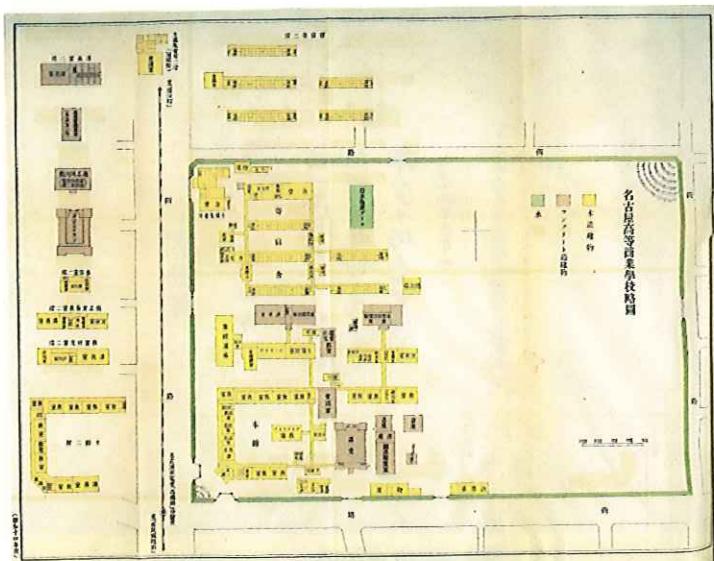
ケース 10-2



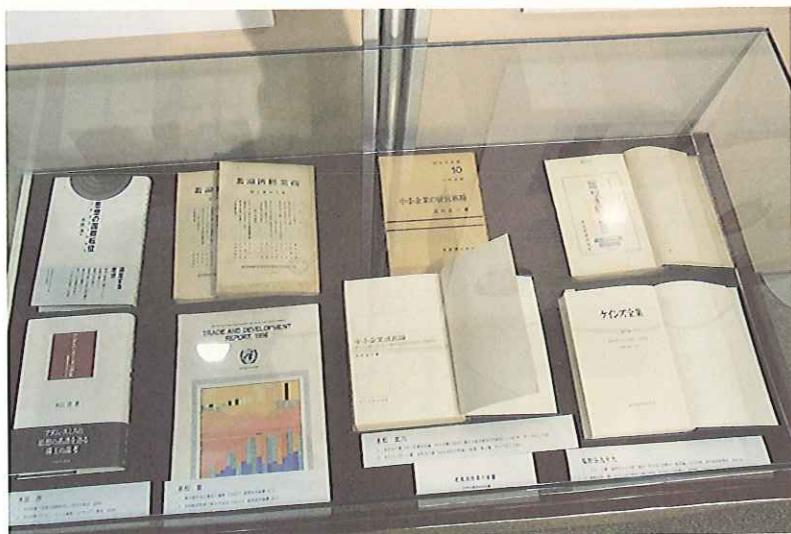
ケース 11-1



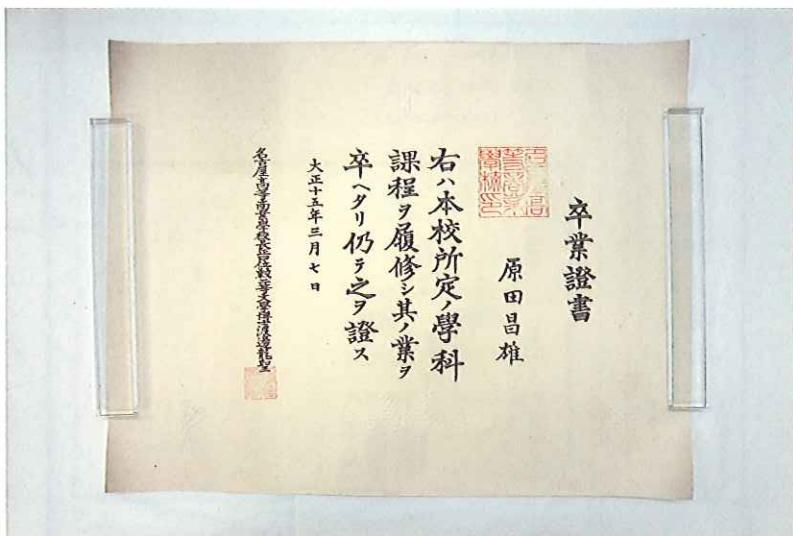
ケース 11-2



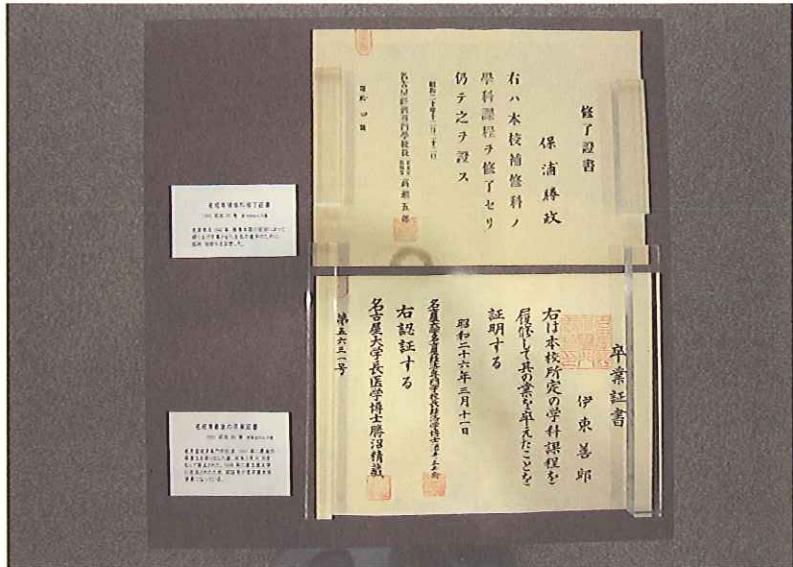
ケース 11-3



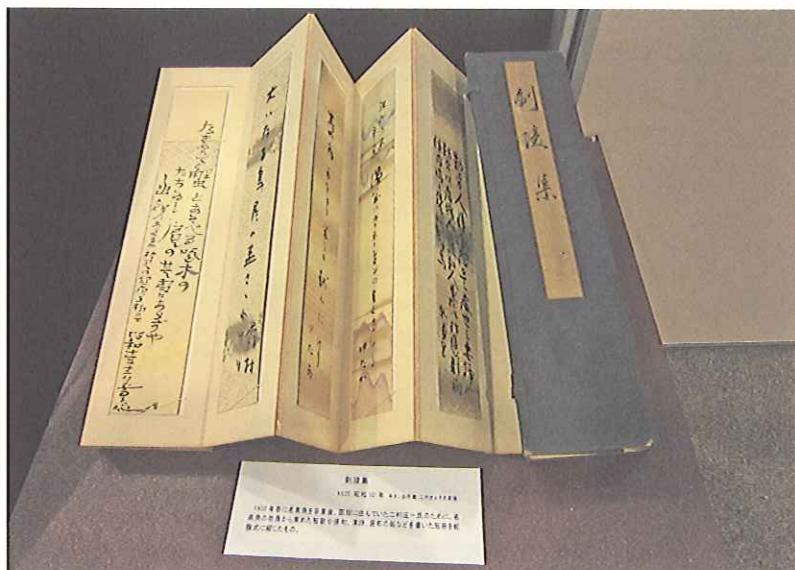
ケース 12



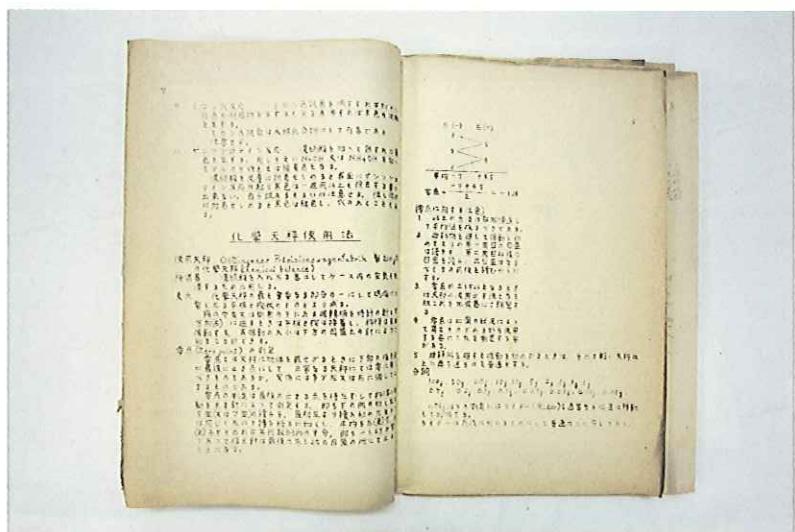
ケース 13



ケース 14



ケース 15



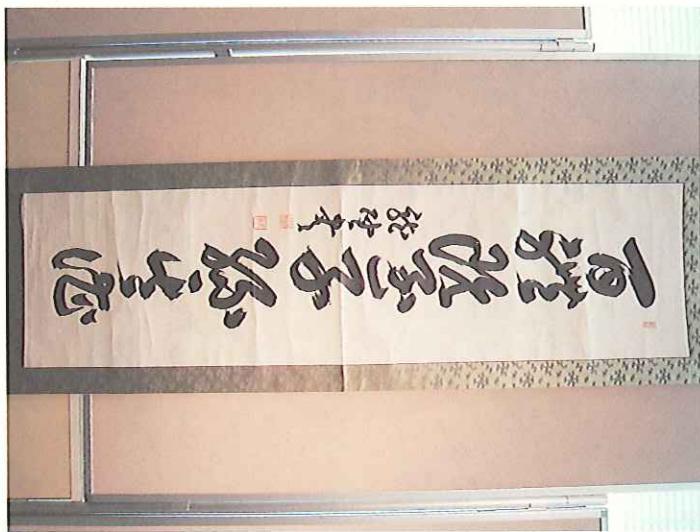
ケース 16



ケース 17



ケース 18



パンディアン展示物 1

邊辺龍聖の自筆書翰
「百禮既至 子孫其湛」

キタサン会所蔵

名高商初代校長の邊辺龍聖（1895-1945）が、如入の祐師を祝って撰毫した。中国西周時代に孔子（紀元前 551-479）が編集したとされる中国最古の詩篇『詩經』小雅篇の一節、

百禮既至 有孚惠心純嘏 子孫其湛 其湛曰美 各奏養能

から抜粋したものである。この中の「其湛（きたん）」は、邊辺龍聖が命名した同窓会（現・キタン会）の名前の由来であり、のちに名高商から名大經濟学部の歴史全体を示す言葉となった。1927（昭和 2）年の同窓会誌『其湛』創刊号に、初代其湛会会长でもあった渡辺校長が寄せた文覚によれば、

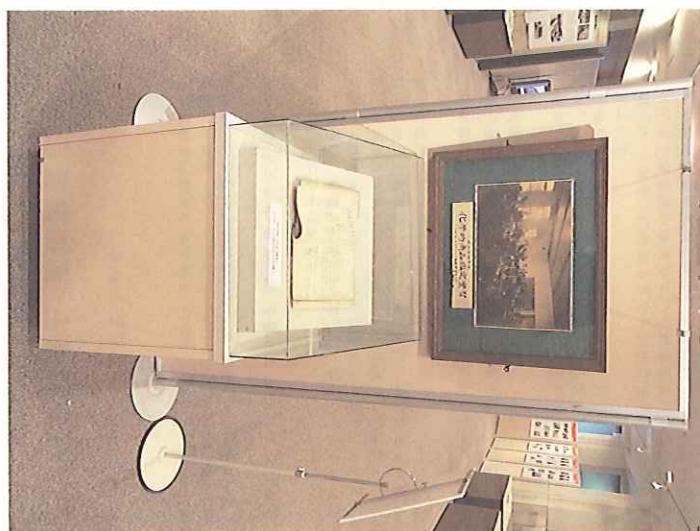
百礼既に至り、至なることあり様になることあり、「能に純嘏を歸う、子孫其れ善めり、其れ善んで曰に來し、各其能を奏せり

と読み、百礼がとのいいく天下にゆきわたり、諸國の歡心を得、天から大きな幸福をいただき、子孫は大いに楽しみ、各々それぞれに得意とする能力を發揮する、といった意味とされている。渡辺は、「其湛」は結果であると同時に原因でもあってほしいとした。名高商の隆盛によって其湛会員が生まれ、其湛会員が得意の能力を發揮すれば、名高商が其才より盛大をさめるとして述べている。

パンディアン展示物 1



パンディアン展示物 2



パンディアン展示物 3



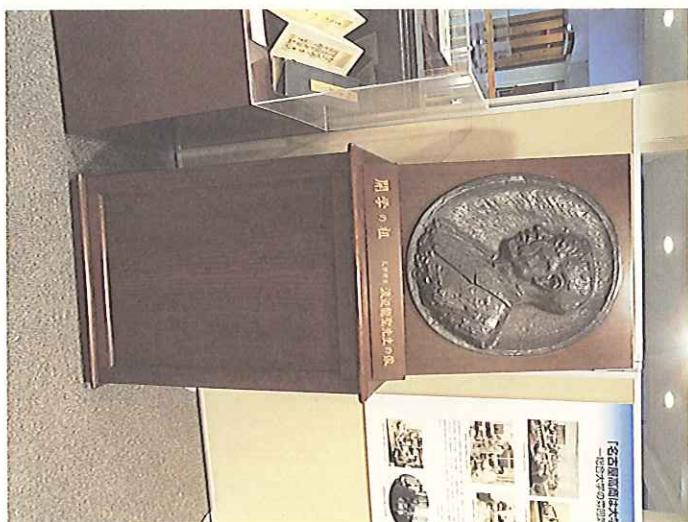
独立展示物 1-1



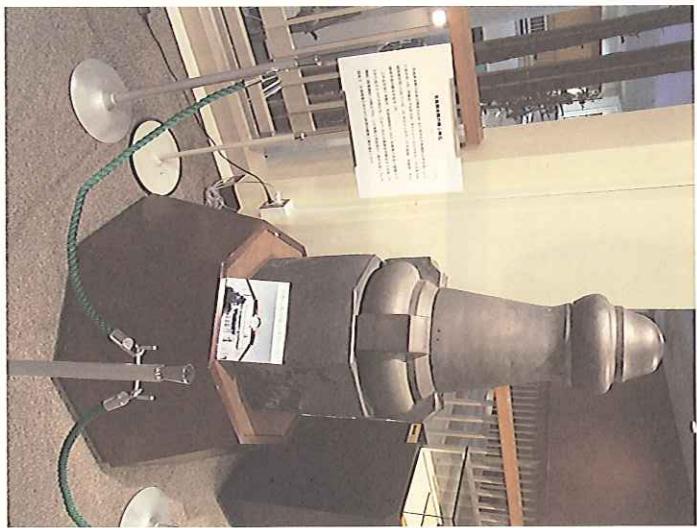
独立展示物 1-2



独立展示物 2



独立展示物 3



独立展示物 4



石井 健一郎 1905-2001

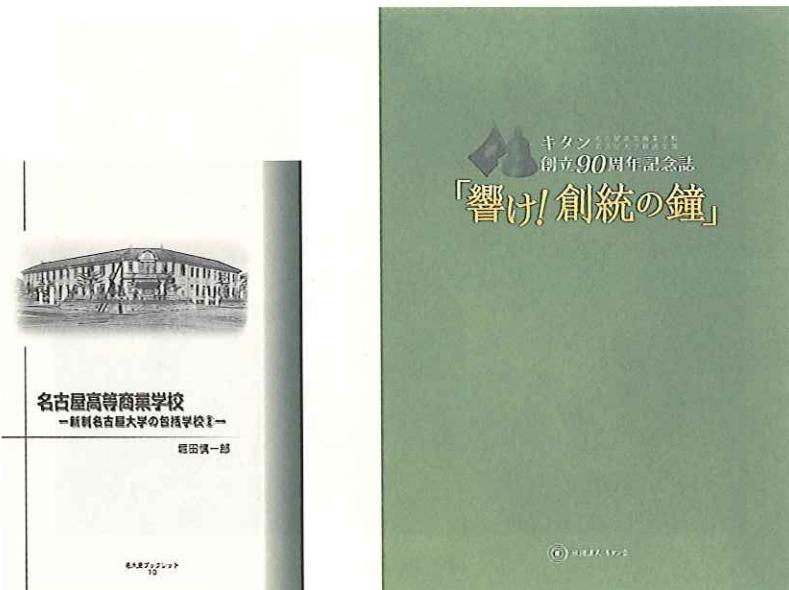
大田町後援会会長
日本製鋼顧問会長
ヨクサン会名会公会
機械公社第3事業部取締役
1923-1926 名高時代第3回生
1926-1927 名高時代第4回生
1956-1962 ヤクルト会員
より

「大田町の銀、大田特許鋼と石井健一郎」

石井は1905年(明治38年)から1982年
の24年間、ヤクルト会長を務めた人物である。
大田町の銀、大田特許鋼の名前で呼ばれていた
高松の学校時代に、彼は手でキーパー
として名を残せた。当然ながら、彼はさわやか
な名前から高松銀盤及びその他の銀で贈られ
た郵便局長より、銀盤が入った書類が届けられ
る。1923年(大正12年)に名古屋に入校。
2年生でキャブテンを務め、高松銀盤センター
カレッジで優勝。3年に全国ランク一位を記
録で優勝出場。翌年4月には名古屋の高野
球場にて金メダルを獲得した。
卒業後は大正電気技術院(現成蹊大学)に
入学。1920年代の不況時に、20歳の若さで勤
物工の責任となり、高松の国松銀盤会
社へ就職する。その後、高松銀盤会社へ
うなびて新規開拓を実施する本の本を読み込
んだ。石井は銀の販路開拓で東京銀の販路
で入りこなすなど、かなりの「冒険家」
でもあったようである。だがこのおかげで、

その秋、1924年秋に名古屋を訪
し会に咸く、社會では石
井をして「中國の王」とし
たという。その彼は東海地方
の多くの企業・団体で貢献
圖が公認に昇り、ヨコハマシ
全体会は公認、名古屋の名古
屋クリニカル病院にあつ
たが、ここに石井が長を務
めることになった。

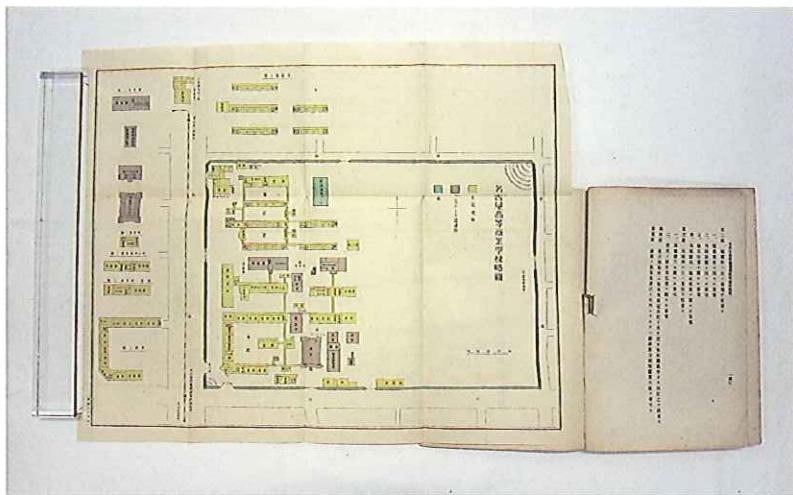
ハンズオン資料 1



ハンズオン資料3, 4



サテライト展示物1



サテライト展示物 2



サテライト展示物 2



サテライト展示（本部1号館玄関）

展示物リスト

| ケース番号等 | 展示品名 | 説明文／備考 |
|--------|--|---|
| 1-1 | 剣陵会館の表札看板 1936（昭和11）年 キタン会所蔵 | |
| 1-2 | 剣陵会館の落成記念絵はがき 1936（昭和11）年 大学文書資料室所蔵 | 剣陵会館は1936年、職員や生徒、本業生の集会施設として、同窓会其並会と学友会有志の寄付により、同年竣工の生徒集会所に改築して建設された。和洋折衷の3階建てで、大広間、食堂、集会室、会議室などのほか、3階には宿泊施設もあった。 |
| 1-3 | 「名古屋高等商業学校一覧」『名古屋経済専門学校概覽』 大学文書資料室所蔵 (河合弘登氏寄贈／キタン会寄贈) | 「其述」創刊号 1927（昭和2）年 大名高商の同窓会である其述会の機関誌として創刊された。のちに機関紙となり、現在は『キタン新聞』として毎月発行されている。 |
| 1-3 | 学友会誌『剣陵』 大学文書資料室所蔵 | 1922（大正11）年に『学友会誌』として創刊、年2～3号が刊行された。「剣陵」が通称となり、1930（昭和5）年から正式に『剣陵』と改題された。剣陵は名高商の通称。学友会文芸部が編集を担当した。 |
| 2-1 | 商工経営科臨時綴り上り簿算要項 1943（昭和18）年 大学文書資料室所蔵 | 本来なら1944年4月に入学するはずの四年度卒業生が、43年10月入学に繰り上げられており、名高商など高等商業学校の修業年限が3年から2年半に縮減されたことへの対応であると思われる。 |
| 2-1 | 名古屋工業経営専門学校の徽章と付けた職選帽 1944（昭和19）～45年頃 大学文書資料室所蔵（キタン会寄贈） | |
| 2-1 | 1944（昭和19）年の要略祭アルバムより 小出悦子氏提供 | 1943年4月に名高商に入学したが、直からの召集によって修業中途の45年3月には中退せざるをえなかつた小出幸雄氏は、名高商時代を含めた職選帽の表明な日記を残した。 |

| | | |
|-----|---|--|
| 2-2 | 喫煙袋アルバム 小出悦子氏所蔵 (小出幸雄氏日記) | 表紙のマークは名古屋工業経営専門学校の校章。名高商の校章の裏と刻はそのまままだが、勾玉を模したCollege of CommerceのC Cの代わりに、工場の齒車をデザインしたものになっている。 |
| 2-2 | 戦時期の『剣陵』と『商業経済論叢』 大学文書資料室所蔵 (河合弘登氏寄贈) | 学友会が発行され、報國団が結成されたことにより、「剣陵」も報國団誌となつた。名古屋高等商業学校商業経済学会発行の『商業経済論叢』は、1940年度に刊行した4号全てを「皇紀2600年記念論文集」とした。 |
| 3-1 | 復員学生18名による喫煙書 1946 (昭和21) 年 大学文書資料室所蔵 (キタノ会寄贈) | 「専修科」で1年の実務教育を終えつつあった復員学生たちは、修業年限が短すぎるとして本科編入をうつえたが叶えられなかつた。これをうけて、せめて本科2年生の懇願生となることを野本校長に頼願した。 |
| 3-1 | 喫煙袋の聚ひ誕生大会決議文 1948 (昭和23) 年 大学文書資料室所蔵 (キタノ会寄贈) | 10日簡易く夏季休暇に入ることを要求している。理由として、食糧事情の悪化、学費のためのアルバイト日数確保、登下校の交通運賃の値上げ、が挙げられている。 |
| 3-2 | 名経専職員組合によるストライキ通告 書 1948 (昭和23) 年 大学文書資料室所蔵 (キタノ会寄贈) | GHQの育成方針によって多くの労働組合が結成され、全国で激しい労働運動が起つたが、名経専でも同様であつた。委員長の末松玄六は名経専教授で、のちに名大経済学部の第5代学部長を務めた。 |
| 3-2 | 其趣会の野本校長への申し入れ 1948 (昭和23) 年 大学文書資料室所蔵 (キタノ会寄贈) | 同窓会其趣会は、名経専の単科大学への移行に最も熱心であり、名大への合流も条件付き賛成であった。この時期には、将来の法学科、経済学部への分離を前提としての法経学部設置がほぼ決まつていたが、其趣会は満足していないかったことが分かる。 |
| 4-1 | 『商業経済論叢』 大学文書資料室所蔵 (河合弘登氏寄贈) | 名古屋高等商業学校商業経済学会によつて1923(大正12)年に創刊された、名高商の学術的中心となつた雑誌。年に複数号が刊行された。名経専廃止半年後の1951年9月が最終号となつたが、同年2月にその後雑誌として『経済科学』(名古屋大学経済学部発行)が創刊された。 |
| 4-1 | 『商業美術論叢』 大学文書資料室所蔵 | 名古屋高等商業学校商業美術研究会(コム・アート)によつて、1932(昭和7)年に創刊された。商業美術とは、商品の広告や宣伝、ライトアップなどの効果的な方法を、消費者心理の分析によつて研究するもの。 |
| 4-2 | 名高商産業調査室『調査報告』 昭和初期 名古屋大学経済学図書室所蔵 | 産業調査室が刊行し、最新の計量核算などで分析した調査の成果が掲載された。戦後、名古屋大学経済学部産業調査室によつて『調査と資料』が創刊され、現在も大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターによつて刊行が継続されている。 |

| 名高商教員の著書 | 大学文書資料室所蔵 |
|--|---|
| 4-3 1929(昭和4)年度名高商入学案内 学文書資料室所蔵 | |
| 5-1 授業で使われた銀行算証帳類およびテキストなど 5-2 学文書資料室所蔵 (河合弘豊氏寄贈) | 1936年に名高商へ入学した河合誠人氏(故人)が第2学年の簿記の授業で使った帳簿とテキストを編さんした山崎英雄と野本鶴之助も名高商教員であった。河合氏は、銀行界で活躍すると同時に、河合塾の経営にも手腕を発揮した。詳しくは、会場内のハンズオン資料を参照。 |
| 6-1 野球部のスコアブック (全国高専野球大会決勝) 1931(昭和6)年 大学文書資料室所蔵 (キタン会寄贈) | 名高商野球部は、甲子園球場でおこなわれた第8回全国高専野球大会優勝 (決勝戦)において、立命館大学予科に勝って優勝した。この試合の模様は、音源としてはじめでいたラジオでも放送された。 |
| 6-1 第6回東海学生駅伝の区間賞盾 (昭和17)年 大学文書資料室所蔵 (寺尾脩氏寄贈) | 名高商陸上競技部は東海を代表する強豪であった。1942年の第6回伊勢神宮熱田神宮参拜東海学生駅伝競走(現在の東海学生駅伝対校選手権大会)において、名高商は念願の初優勝を果たした。最長距離の第3区(21.3km)を走った寺尾脩氏は区間賞を獲得した。そして2005(平成17)年、第67回東海陸上駅伝において、名古屋大学陸上競技部が「63年ぶり」に優勝した。 |
| 6-2 全国高専陸上競技大会優勝トロフィー (左) キタン会所蔵 | 名高商陸上競技部は、全国高専商業学校陸上競技大会において、1932(昭和7)年の第1回から3連覇するなど、最多の優勝回数を誇った。 |
| 6-3 第9回全国高専商業学校庭球大会優勝トロフィー(右) タン会所蔵 | 国松忠教授(第2代校長)などを中心に野茨(のばら)会がつくれられ、句集『野茨(のばら)』が発行された。国松教授は「(国松)ゆたか」の俳号を持ち、「俳句涵泳法研究」(1948年)、「国松ゆたか句集『月の歌』」(1965年)などを刊行した。展示の見開きは国松教授の句。手書きは、国松教授と親しかった高浜盛子が1939年の『野茨』に寄せた句である。 |
| 6-4 『野茨(野ばら)』 キタン会所蔵 | |
| 6-5 商業英語の定期試験問題と答案 (昭和12)年 水田茂氏(名高商1940年卒業)提供 | 1937年度第1学年の中間試験のものか。当時の商業英語担当は北川一雄助教授(水田茂氏)教授。北川は名大経済学部でも教授となり、第6代学部長を務めた。 |

| | |
|--|---|
| 7-1 1955(昭和30)年度 キタン会所蔵(大竹俊介氏寄贈) | 入学志願票・入試受験票と合格通知(大希望した学科に進めない場合もあった。 |
| 7-1 授業料領收証書 1955(昭和30)年度 キタン会所蔵(大竹俊介氏寄贈) | 授業料は前・後期3千円ずつの6千円であった(現在は約54万円)。当時の物価は上の展示を参照。国家公務員上級職試験合格者の初任給が9千円程度であったことを考えると、現在よりかなり安かつたといえる。 |
| 7-1 通学証明書と電車定期券発行申込書 1956(昭和31)年 キタン会所蔵(大竹俊介氏寄贈) | 当時はまだ地下鉄がなく、市内で通学に使う主な公共交通機関は市街電車(路面電車)であった。一宮市奥町に住むこの学生(大竹氏)は、名古屋駅まで奥町から金山橋、そこから名古屋市営の市街電車で淀子という通学路であった。淀子には、名古屋大学分校(教養部)があった。 |
| 7-2 名古屋大学生協同組合購買部の商品目録 1955(昭和30)年度 キタン会所蔵(大竹俊介氏寄贈) | 開学記念祭パンフレット 1956(昭和30)年度 キタン会所蔵(大竹俊介氏寄贈) |
| 7-2 開学記念祭パンフレット 1956(昭和30)年度 キタン会所蔵(大竹俊介氏としておこなわれていた。ただ開催時期は名大祭と同じであり、仮装行列やファーバーストームもすでにおこなわれていた。 | 開学記念祭(57年からは大学祭)1960年に第1回名大祭がはじまる前の大学祭は、開学記念祭(57年からは大学祭) |
| 8-1 教養部(文科系2年前期) 捩業時間割表 1956(昭和31)年度 キタン会所蔵(大竹俊介氏寄贈) | 教養部(文科系2年前期) 捩業時間割表 1957(昭和32)年度 キタン会所蔵(大竹俊介氏寄贈) |
| 8-1 経済学部ゼミナール概要一覧表 1957(昭和32)年度 キタン会所蔵(大竹俊介氏寄贈) | 経済学部前期授業時間割表 1957(昭和32)年度 キタン会所蔵(大竹俊介氏寄贈) |
| 8-2 経済学部学生論文集『COSMOS』 第2号 1955(昭和30)年に創刊され、1994(平成6)年までほぼ毎年刊行が継続された。 | 経済学部学生論文集『COSMOS』 第2号には、水谷研治氏(中京大学名誉教授)の名前が見える。 |

| | | |
|-----------|--|--|
| 9-19-2 | アダム・スミス『国富論』初版（上巻／下巻）名古屋大学水田経済研究所蔵 大学院経済学研究科所蔵 水田洋 訳／杉山忠平訳『国富論』 2000（平成12）～2001年 岩波文庫 | 「国富論」は、自由主義経済学を最初に体系化したアダム・スミスの著書で、1776年にアメリカ独立革命を支持する意味もこめて出版され、同時にイギリスの産業革命の教科書になった。それ以来、イギリス本国で版を重ねるだけではなく、各國の言語に翻訳されて世界に広く流布している。名古屋大学では、2組の初版本を経済学研究科が所蔵している。今回展示したのは、1949（昭和24）年に当時の法経学部が一皆市のか川家から購入したもの。名古屋大学名後半にはアダム・スミス研究の第一人者である水田洋（1919-）は、1940年代後半には国富論の草稿の邦訳、1960年代に入つては『国富論』の邦訳を発表した。今回展示した岩波文庫版では監訳を担当したが、完成前の訳者死去後、本文訳稿の点校、原注の翻訳、全文にわたる訳注の作成などを自らおこなっている。 |
| 10-1/10-2 | 名古屋高等商業学校行政文書 大学文書資料室所蔵 | 「名高商」の事務文書は、1951（昭和26）年の廃止後も経済学部で大切に保存され、現在は大学文書資料室に移管されている。600点をこえる昭和初期を中心とするこの文書群は、名大の歴史にとどまらず、近代日本の高等教育史を明らかにする上できわめて貴重な歴史資料であり、近く一般公開する予定である。 |
| 11-1/11-2 | 「名高商・校舎」再現イメージ模型（縮尺：1/400） | 名高商の約2万坪（66,000m ² ）のキャンパスは、「剣豪」と愛称され、3年学合わせて600～700名前後の学生が学びました。この模型から判るとおり、経済の経済学部の校舎をはじめ、単なるカレッジではなく、総合大学に匹敵する規模でした。これだけの規模の施設には、将来名高商が果たしてくれるであろう役割への大きな期待から、創立記念の13を地元政財界が負担するなどの支援があったからこそ実現できたと思われます。また、校舎は通常の教室や講義室だけではなく、実践・演習用の施設の多さにも驚かされます。このことからも、渡辺龍里初代校長が目指した、実践的な教育方針がはっきりとうかがい知ることができます。この模型製作に際しては、1939年（昭和14年）の「名古屋高等商業学校一覧」に添付された略図と現存する写真を基にしました。当時のカラーリ写真が存在しないため、色については、現存する写真を参考にします。多くの部分は推測しながら作製しました。これらについての情報をお持ちの方は、ぜひキヤン会までお寄せください。東山地区への移転後、現在は名古屋市立大学・医学部及び付属病院となっていますが、その南西の片隅には、名古屋市のご好意により、今もなお当時を思ふ大樹の樹と幾つかの石碑が、「キヤン記念園」として残されています。一概型製作担当：キヤン会・山村哲朗（S44）－ |
| 11-3 | 名古屋高等商業学校略図 大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター所蔵 | 「名古屋高等商業学校一覧」自昭和十三年至昭和十四年（1939年）名古屋大学 |

| | | |
|----|---|--|
| 12 | 水田洋 | 1. 水田洋著『思想の国際化』(名古屋大学出版会、2000) 2. 水田洋著『アダム・スミス論』(ミネルヴァ書房、2009) |
| 12 | 赤松要 | 1. 我が国手工業品の趨勢 (1935.7) 商業經濟論叢13上 2. 吾國經濟發展の総合評述法 (1937.7) 商業經濟論叢15上 |
| 12 | 末松玄六 | 1. 末松玄六著『中小企業成長論—中小企業の成長に関する経営経済学的研究』(1961年、ダイヤモンド社) 2. E. T. ペンローズ著、末松玄六訳『会社成長の理論』(初版・第2版、ダイヤモンド社) |
| 12 | 塙野谷九十九 | 1. ケインズ著、塙野谷九十九訳『雇用・利子及び貨幣の一般理論』(訂正再版、丸洋經濟新報社、1942年) 2. 塙野谷佑一訳・ケインズ全集『雇用・利子及び貨幣の一 般理論』(丸洋經濟新報社刊、1983年) |
| 13 | 名高商卒業証書 1926 (大正15) 年 大学文書資料室所蔵 (山本幸江氏寄贈) | 西川昌雄 (1905 - 1986) は、豊田佐吉の右腕とも言われた西川秋次の養嗣子となり、名古屋ゴム (のちの豊田合成) 株式会社の経営などに手腕を發揮した。1961 (昭和36) 年に祖父の秋次が設立し、昌雄が第2代理部長を務めた (財) 西京美術学校 (現・豊橋美術学校) からは、これまで多くの名大学生が奨学生金の援助をうけている。 |
| 14 | 名経専最後の卒業証書 1951 (昭和26) 年 伊藤善郎氏所蔵 | 名古屋経済専門学校は、1951年に最後の卒業生を送り出した後、同年3月31日をもって廃止された。1949年に名古屋大学に包括されたため、認証者が名古屋大学総長になっている。 |
| 14 | 名経専補修科修了証書 1945 (昭和20) 年 保油勝政氏所蔵 | 名高商は1942年、修業年限の短縮によって繰り上げ卒業させた生徒の進学のために、(臨時) 补修科を設置した。 |
| 15 | 創設集 1935 (昭和10) 年 所蔵 (二村きよ子氏寄贈) | 1935年春に名高商を卒業後、函館に住んでいた二村庄一氏のために、名高商の教員から集めた短歌や俳句、眞珠、座右の銘などを書いた短冊を蛇腹式に綴じたもの。 |
| 16 | 商品学教室「化学的 商品実験要目」 1943 (昭和18) 年度 大学文書資料室 所蔵 (河合弘登氏寄贈) | 名高商3年生の船垣登は、1924年の第6回全国学生相撲大会で優勝した。学生相撲となった船垣は、相撲同家の吉田道風から総指手綱が贈られた。船垣の写真は、上の展示パネルを参照。船垣はのちに財界人としても活躍した。詳しく述べては、本会場のハンズオンコーナーを参照。 |
| 17 | 学生相撲船垣登の総指手綱 1924 (大綱となつた船垣は、相撲同家の吉田道風から総指手綱が贈られた。船垣の写真は、上の展示パネルを参照。船垣はのちに財界人としても活躍した。詳しく述べては、本会場のハンズオンコーナーを参照。 | |

| | | |
|---------------|--|---|
| 18 | 名古屋大学経済学博士第1号学位記 1963(昭和38)年 大学文書資料室所蔵(永井義雄氏寄贈) | 永井義雄名古屋大学名譽教授は1950年に名大経済学部に入学、水田洋教授(現・名誉教授)に師事した。1959年に経済学部助手に就任、その後1981年から90年まで経済学部教授を務めた。専門はイギリス経済史・思想史で、日本におけるベンサム研究の第一人者として知られる。より詳しく述べは、本会場のハンズオンコーナーを参照。 |
| パン1 | 渡辺潤翌の自筆書翰帖 「百禮既至 子孫莫遺」 キタン会所蔵 | 本展示記載〇ページ参照。 |
| パン2 | 名経専学生の入隊に際しての寄せ書き 1945(昭和20)年 浅田祐男氏所蔵 | 名経専3年生であった浅田祐男氏の入隊に際しての寄せ書き。国松型校長をはじめ、酒井正兵衛、那菊之助、宇都宮仙太郎、深利重隆、山崎研治、田中藤一郎、鬼島正光といった教員たちの名前も見られる。大きく書かれた「拡成(じょうい)(元)外国をさげすんだ言い方)を擴(う)つ」の文字は国松校長による。1943年まで、名高商など専門学校の在学生は徵兵を猶予されていた。しかし同年10月に徵兵延期措置が撤廃され、いわゆる学徒出陣が始まった。浅田氏は、1943年4月に奈良中学から名高商に入学したが、徵兵によって1945年6月からの入隊となり、学業の中止をよぎなくされた。敗戦後、45年8月末に復員し、9月に名高商に復帰、9月末に頽り上げて卒業した。 |
| パン3 | 大正十四年度 化學的商品鑑定實習 (1926年フィラデルフィア萬國博覽會出品) | 額に入っていたものをそのままパンディアンに取り付けた(タイトル表示もそのまま)。そのすぐ下にケース17を置いた。 |
| 独立1-1/ 1-2 | 創続の鏡 | 「創続の鏡」の由来 「創続の鏡」は、名古屋大学経済学部の前身である名古屋高等商業学校の第一回卒業生によつて寄贈された其端板の鏡頂にあつて、二十石余り授業の開始と終了を告げた時鐘であります。その妙音は近隣の市民にも愛されました。幸い「創続の鏡」は難を逃れ、名古屋大学経済学部に継承され、今日に至っております。鏡銘は、初代創設者水野氏の揮になるもので、出典は益子二巻の「君子創業垂統、忍可繼也」君子は業を繼め鏡を重ね、継ぐことを為さんのみ」(君子はのちに事業の基礎を築き、その事業を子孫に伝えるようになればよい)にあります。先人の志を後輩が受け継いで発展させる、この「創続の精神」が鏡の音とともに、永遠に本学に伝えられることを祈念いたします。 |

| | |
|---|--|
| | 名高商では、創立期に校章を大きくあしらった校旗が作られた。校旗（正顎には御船頭章）のデザインは国松豊教授（のも校長）によるもので、ローマ神話の歴史と元神マーキュリーと熱田神宮のイメージを組み合わせた。熱田神宮の神劍（三種の神器）の1つで熱田神宮の神体である「草薙（くさなぎ）の剣」を中心的に、マーキュリーの翼を付け、「College of Commerce」のCCを勾玉（まがたま）にデザインして配している。学校および校地の迎称である「剣陵」「剣ヶ丘」も、熱田神宮のイメージを由来とした。 |
| 独立2 校旗 大正後期か （キタン会寄贈） | 校章マークユリーをあしらった名高商校旗 |
| 独立3 開学の組 文学博士渡辺龍理先生の像 | 名高商本館の正面玄関脇上には、上に突き出た特徴的な形を持つ2つの瓦がある。洋風瓦ではあるが、きれいでいらしいのかかった日本の伝統技術が用いられている。40年以上にわたって名高商、名経専、名大経済学部の歴史を見守った。この瓦を頂く本館は、名高商開校の1921年建築の木造2階建てで、上から見るとコの字型になっており、中には聖母室や教室などがあった。開校（授業開始）の時点では、この本館と寄宿舎の一部が完成していた程度で、以後授業のかたわら校舎の建設工事が進められた。 |
| 映像1 スライドショー | 第1回名大祭の8ミリ映像（経済学部 1963年卒業生原田治彦氏撮影、8分、 1960年） |
| 映像2 ハンズ1 名高商WHO'S WHO | 取り上げた人物（五十音順）=赤松要、石井健一郎、鶴見豊、河合頼人、河島和也、 滝川正二、盐野公五十鈴、G.C.アレン、高山成雄、瀬川正男、永井義雄、西川昌雄、 長谷川榮一、古川勝巳、水田洋、与良正 |
| ハンズ2 名高商 一九二九年度 入試問題 | 教育研究会編『全国高等学校専門学校入試試験問題集 大正十二年度』（教育 研究会、一九二四年） |
| 堀田慎一郎『名古屋高等商業学校一新 制名古屋大学の包括学校②』（名大史 ックレット10、名古屋大学大学文書 資料室、2005年） | 2冊を展示。希望者には無償で配布。 |
| ハンズ4 『キタン90周年記念誌 翻け！創続の 鏡』（社团法人キタン会、2010年11月） | 1冊を展示。 |

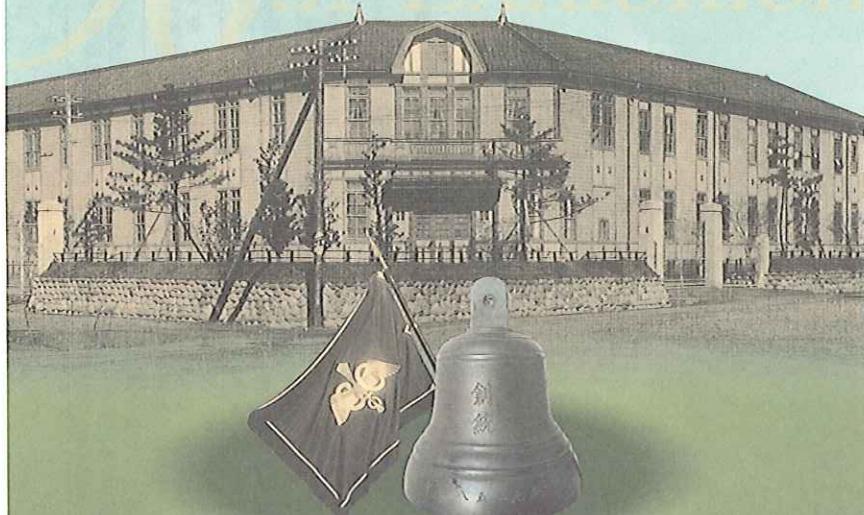
| | | |
|-----|---|--|
| サテ1 | 名古屋高等商業学校絵葉書 大学文書 資料室所蔵 | 年代は不明だが、周囲に烟が多いことや、道路が舗装されていないことから、1920(大正9)年に創立された当初のものではないかと推測される。名高商の地は、創立の翌年に名古屋市域に編入され、以後急速に市街地化が進んだ。 |
| サテ2 | 名古屋高等商業学校略図 1941 (昭和 16) 年 大学文書資料室所蔵 | 名高商が毎年刊行していた『名古屋高等商業学校一覧』の巻末に綴じこまれていたもの。校地の面積は約2万坪(66,000m ²)もあり、公式陸上トラックを備えるなど、地域のスポーツ振興の拠点でもあった。 |
| サテ3 | 名高商校友会誌『剣陵』 大学文書資料 室所蔵 | 校友会には、運動部の多くや文芸部などが属し、名高商文化の中心であった。文芸部が編集する校友会誌『剣陵』には、文芸作品や部活動の記録などが収載されている。 |

※「ケース番号等」欄..本展示記録掲載写真等のキャプションと対応。1 ~ 12は120cm × 60cm、13 ~ 18は60 × 60cmの展示ケース（枝番号は本記録の掲載写真に対応）。「パン」はパンティアン（展示用の創立）に貼り付けて展示したもの、「独立」はケースに入れずそのまま床に置いて展示したもの、「ハンス」はハンズオンコーナー（資料コーナー）で入場者が自由に閲覧できるようにした資料、（映像）は液晶モニターで上映したもの、「サテ」は会期中に名古屋大学本部1号館の玄関で実施したサテライト展示。

※「展示品名」欄…フレート等で表示した展示品のタイトル。フレート等を添付しなかったものは斜体字で表示。

※「説明文／備考」欄…フレート等で表示した説明文。備考は斜体字で表示。「独立」については、専用展示台の説明フレート文章。斜体字は備考用。

90th Anniversary 90th Exhibition



キタン 名古屋高等商業学校
名古屋大学経済学部 創立90周年記念展

「響け! 創統の鐘」

名高商から名大経済学部への90年

開催期間 2010.11.3(祝)～12.18(日)

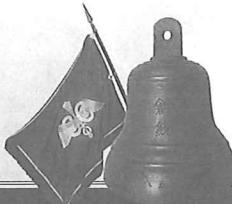
- 会場 名古屋大学博物館
- 休館日 月曜・月曜
- 開館時間 10:00～16:00(入館は15:30分まで)
- 入場料 無料
- 問い合わせ 名古屋大学博物館 Tel 052-789-5767 URL <http://www.num.nagoya-u.ac.jp/>

主催：名古屋大学博物館、名古屋大学大学文書資料室、名古屋大学経済学部、直属法人キタン会

キタン 名古屋高等商業学校
名古屋大学経済学部 創立90周年記念展

「響け! 創続の鐘」

名高商から名大経済学部への90年



本年、名古屋大学経済学部は、その前身である旧制名古屋高等商業学校(名高商)の創立から数えて90周年を迎えるました。今回はこれを記念し、1920(大正9)年の名高商創立から、1959(昭和34)年に名古屋大学経済学部が名高商のあった桜山から現在の東山に移転した頃までを中心、その特色ある歴史を分かりやすく展示します。

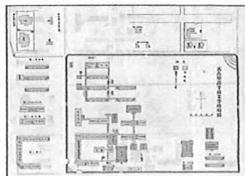
名高商や草創期の名古屋大学経済学部では、どのような研究や教育がおこなわれ、学生たちはどのような学風の下で青春時代をおくったのでしょうか。名古屋大学とキタン会が長年にわたって収集してきた膨大な資料からとくに厳選した展示品や写真が、それらを明らかにしてくれるでしょう。

なお、会場では、名高商の歴史を分かりやすくまとめたブックレットを無料で差し上げます(数に限りがあります)。

おもな内容

1 名高商から名大経済学部へ —その歴史とキャンパス—

地元の大きな期待を受けて創立され、戦争の影響で大きな再編を余儀なくされたながらも、独自の教育と校風をほこった名高商と名大経済学部の歴史とそのキャンパスの変遷。



【主な展示物】
学帽、帽章、襟章、学生の日記、学友会誌「創建」、学友会各部の表彰盾・杯、表彰状、部報、作品集、バッジ、出征時の寄せ書き入り日章旗、写真パネル、など

2 名高商の教育と研究 —実践主義と総合大学の雰囲気—

初代校長渡辺龍聖が確立した「二大信条」と独自のかりきゅうらによる実践主義教育、そして大学にも例えられた高水準の教師陣とその研究とは。



【主な展示物】
商品見本、名高商発行の学術雑誌、教科書・教材、入試関係書類、入試問題、卒業証書、教員の著書、カリキュラム、写真パネル、など

3 名高商の学生生活 —自由と文武両道と—

眞面目でありながらも、自由を謳歌した「幹な高商さん」たち。彼らによるキャンバススタイルと学生文化。学生スポーツ界での活躍とスポーツ振興。



【主な展示物】
学帽、帽章、襟章、学生の日記、学友会誌「創建」、学友会各部の表彰盾・杯、表彰状、部報、作品集、バッジ、出征時の寄せ書き入り日章旗、写真パネル、など

4 名大経済学部への継承・発展 —桜山から東山へ—

戦後、名経専から教員とキャンパスを受け継いだ名大経済学部の草創期。歴史を刻んだ桜山から、眞の総合大学をめざして東山での再出発。



【主な展示物】
入試関係書類いろいろ、授業時間割、ゼミ概要一覧、定期試験関係いろいろ、名大初の経済学博士学位記、進学定期票、カリキュラムの各種ビラ、写真パネル、など

*そのほか、資料を手に取ってご覧いただけるハンズオンコーナー、なかなか見られない貴重な映像を視聴いただけるコーナーなどもあります。

注

- (1) 大学文書資料室の展示活動については、拙稿「大学アーカイブズの展示活動とその諸問題－名古屋大学における「八高展」を事例に－」(『名古屋大学大学文書資料室紀要』第一七号、二〇〇九年三月) を参照。また、これまで大学文書資料室が開催してきた、まとまつた会期を設定した特別展・企画展の詳細については、「名古屋大学博物館第四回特別展記録」名帝大けふ誕生－初代総長波澤元治とその時代』(『名古屋大学博物館報告』第一八号、二〇〇二年一二月)、堀田慎一郎・山口拓史・羽賀祥一・西川輝昭「第一五回名古屋大学博物館企画展記録 伊吹おろしの若者たち－八高創立百年の歴史から－」(『名古屋大学博物館報告』第二四号、二〇〇八年一二月)、前掲拙稿「大学アーカイブズの展示活動とその諸問題」、拙稿「企画展『医学教育の礎からノーベル賞まで－名古屋大学創立七〇周年(創基一三八周年)記念－』(『名古屋大学大学文書資料室紀要』第一八号、二〇一〇年三月)を参照されたい。
- (2) 二〇〇八年度の企画展「伊吹おろしの若者たち－八高創立百年の歴史から」においても、旧制第八高等学校同窓会である八高会には、資料収集および展示費用の面で多大なご協力をいたいたが、同窓会組織と展示とともに作り上げたといえるのは今回が初めてである。
- (3) 一九二三(大正一二)年五月、旧制名古屋高等商業学校同窓会「其湛会」として発足。五三(昭和二八)一二月、社團法人に改組。六九年、名古屋大学経済学部同窓会「啓友会」と一本化して「其湛啓友会」となり、七六年、「キタン会」と改称して現在に至る。事務所は、名古屋大学大学院経済学研究科・経済学部校舎内にある。
- (4) 一九二〇(大正九)年一月に、旧制専門学校(官立)として設置。四四(昭和一九)年三月、名古屋工業経営専門学校に転換したが、敗戦後の四六年四月、名古屋屋經濟専門学校に改組。四九年五月、新制名古屋大学に包括されたのち、五一一年三月をもつて廃止された。その校舎の全部や教員の一部、あるいはさまざまな伝統が名古屋大学経済学部(四八年九月、旧制名古屋大学法経学部として設置、新制移行後の五〇年四月、経済学部として独立)に引き継がれたことから、名古屋大学の前身学校の一つとされている。詳しくは、名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一、同通史二(名古屋大学、一九九五年)、

同部局史一（名古屋大学、一九八九年）、拙著『名古屋高等商業学校―新制名古屋大学の包括学校②』（名大史ブックレット一〇、名古屋大学大学文書資料室、二〇〇五年）などを参照。

(5) 第一五回名古屋大学博物館企画展「伊吹おろしの若者たち―八高創立百年の歴史から」（主催＝名古屋大学博物館・名古屋大学大学文書資料室、会期＝二〇〇八年一〇月七日～一月八日）。この企画展について詳しくは、注(1)で挙げた展示記録を参照。

(6) この記念展は、第一五回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念」として、名古屋大学博物館と名古屋大学大学文書資料室の共催で、二〇〇九年一〇月一七日から同年一二月二六日を会期におこなわれた。詳しい内容については、注(1)で挙げた展示記録を参照。

(7) ここで「キタン（其進）」とは、名古屋高等商業学校から名古屋大学経済学部の歴史全体を指す言葉として使われている。

(8) ただし、のちにこの二〇一〇年一〇月一六日が、名古屋市で開催される生物多様性条約第一〇回締約国会議（COP10）の会期中にあたることから、博物館でこれに関連する展示を実施するよう名古屋大学本部からの強い要請があつたため、ホームカミングデイを企画展の会期中に含めることができなくなつた。

(9) この一二名は、いずれも昭和三〇年代後半から四〇年代前半に経済学部を卒業した方々である。なお、本文後述の福澤直樹准教授、小沢浩准教授も経済学部卒業生でキタン会会員である。

(10) 名古屋大学大学院情報科学研究科研究生（当時）。

(11) 「創続の鐘」とは、一九二四（大正一二）年に第一回卒業生によつて名高商に寄贈された直径四〇cm×高さ五一・五cmの鐘で、

名高商構内の其湛塔の頂上に設置されて時を刻み、名高商のシンボルとなつたものである。「創続」の語は、「孟子卷一」の「君子創業垂統（君子業を創め統を垂れる）」からとられ、創業者は後世の者が事業を成功させてくれるものと信じて、今に最善を尽くしてそれを伝えればよい、といった意味とされる。現在、当時の実物がキタン会に所蔵されている。

(12) さらに山村氏は、本文後述『キタン（名古屋高等商業学校・名古屋大学経済学部）創立九〇周年記念誌 署け！ 創続の鐘』（財団法人キタン会、二〇一〇年一月、A四版二六四ページ、定価二二〇〇円）の編集長としての役割も担つた。

(13) 八高から名古屋(帝国)大学に進学したケース以外は、八高会に名古屋大学卒業生は入会していない。また八高会は、二〇〇一(平成一四)年に創立された名古屋大学全学同窓会にも加盟していない。

(14) 展示パネルに使った写真の多くも、キタン会から寄贈された名高商の卒業アルバムから採っている。

(15) 八高展は本企画展よりも展示会場がややせまく約一一〇m²、創立七〇周年記念展は本企画展と同じ会場(約一五三m²)である。

(16) 前掲、『キタン創立九〇周年記念誌 韶け！創続の鐘』。

(17) 原田治彦氏(一九六三年卒)。

(18) この8ミリフィルム映像は、本企画展に先立つて、二〇一〇年一〇月一六日の第六回名古屋大学ホームカミングデイの主会場である豊田講堂において、資料室主催の「ちょっと名大史」展コーナーで上映した。

(ほつた・しんいちろう 大学文書資料室)